

旧徳中
城南高

同窓会々報

第 95 号



城南高校校庭より城南富士を望む (昭和 39 年)

ご挨拶

同窓会会長 栗飯原治仁 (昭和 51 年卒)



平素、同窓会活動にご協力いただき御礼申しあげます。

コロナ禍の厳しい社会環境の下、みなさまにお見舞い申し上げます。

三密回避、自粛、マスク着用など制約を課せられた生活は、それまでの「普通」だった日常生活のありがたさを教えてくれました。ワクチン接種も始まり、コロナ収束への道筋が見えてきたようにも思えますが、一方、変異株の脅威も報じられています。しばらくは気を緩めることができない状況が続くそうです。

令和 2 年は、コロナ禍の状況をふまえ、役員間で協議の結果、「理事会」と「同窓会総会」を併せて小規模での開催を予定していましたが、それも直前の中止を余儀なくされました。

各支部においては、近畿 FS 会は規模を縮小して開催し、(関東) 渦の音クラブは Zoom を利用したオンライン同窓会の開催となりました。各支部同窓会にご参加いただいた同窓生のみなさん、ご準備いただいた役員の方々に、改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

一日も早いコロナの収束、平穏な日常生活の回復を祈ります。そして来年は、以前と同じように同窓生のみなさまと直接お会いして交歓できますことを願っております。みなさまお元気で。同窓会でお目にかかりましょう。

手書きをデジタルに

東京農工大学 副学長 中川正樹 (昭和 48 年卒)

1. はじめに

タブレットがまだ実験機材だった時代から研究を始めて 40 年になる。情報技術は日進月歩ならぬ秒針分秒で進んでいると言われるが、大筋の技術は大河の流れのようにゆったりと、それでいて、岩を削りながら、また、流れを変えながら力強く進んでいる。決して最初から順調にいったわけではない。研究の過程を、今夢中になっている釣りの話と高校時代の思い出なども交えながら、振り返ってみたいと思う。

2. 研究者としてのスタート

昭和 48 年に東京大学に入学し、3 年になる時に理学部物理学科に進級して、コンピュータによる数式処理に興味を持った。その時、人間でなくコンピュータが物理を解く時代が来るのではないかと感じたりした。昭和 52 年に修士課程に進学してすぐに人工知能で有名な英国 Essex 大学に一年間留学する機会を得た。

昭和 53 年の秋に帰国し、経済的理由から就職しなければならないことを指導教官の後藤英一教授に伝えたところ、東京農工大学に情報の学科ができて助手を探していると言う。すぐに「行きます」と返事し、面接も通って昭和 54 年 4 月から助手になった。所属した講座は計算機システム工学。当時、コンピュータはアルファベットしか使えず、日本語が使えるように、日本語処理、日本語出力、そして、入力方式としてのオンライン手書き文字認識 (タブレットの上にペンや指で書かれた文字を筆跡から認識) の研究に着手した。ただ、新設学科の学生実験や演習、そして、研究室の中心である計算機システムの学生指導に大半の時間を要し、僅かな時間をオンライン手書き文字認識の研究に割いた。博士号をとるのに 10 年かかって、平成元年に助教授に昇格し研究室を独立した。その頃はパターン情報システムという政府の大型プロジェクトが進行中で、多額のお金をかけていた。ちなみに、パターン情報は画像や音声のようなアナログ情報を意味し、人間は無意識にそれらを認識できるが、コンピュータによる認識 (パターン認識) はもっとも難しい課題の一つであった。オンライン手書き文字認識も、顔の認識などと同様にパターン認識の一つである。その大型プロジェクトで郵便番号が読み取れるようになり、そこでパターン認識は終わったように言われたが、それらは枠の中に記入された数字だけで、普通の文章を書いたらほとんど読めなかった。

研究にも流行りがある。今で言うなら、自動運転とかヒューマノイドロボッ

トとかスーパーコンピュータなどである。多くの場合に多額の研究費を要する。しかし、新米助教授にそんなテーマを研究する資金力も研究力もなく、優良株投資はできない。一方、オンライン手書き文字認識は完成には程遠く、少ない予算ででき、やはり手書きというものは大事であると考えて研究を継続することにした。多くの大学が取り組んだ研究だが、その多くは着想レベルで終わっていた。ただ、企業には既に相当の実績があり、研究も継続していた。競争は容易ではなかった。

後藤英一先生の先生である高橋秀俊先生が『コンピューターへの道』という本を書かれていて、「生来の天邪鬼 (あまのじゃく) 精神」という言葉が出てくる。天邪鬼は他人の勧めとは反対のことをする。優良株投資はできないので、この天邪鬼精神を心の拠り所に、「ぼろ株投資」することに腹をくくった。ただ「ぼろ株」は本当の「ぼろ」ではなく、いつか花開く可能性のある「ぼろ」でないといけない。優良株投資に成功しても先駆者にはなれない。ぼろ株投資は研究者には向いているように思う。

3. 働き盛り

こんな思いから、オンライン手書き文字認識を中心に、ペンとか指とかで操作する方法 (ユーザインタフェース) と利用用途 (アプリケーション) も視野に入れて研究しようと決めた。独立から 5 年ほど研究を続けると、認識率もそこそこ上がり、ペンや指の座標を読み取る装置 (昔のタブレット) と液晶表示が一体になった今のタブレットが市販されるようになり、直接指示・直接操作 (見ている画面に直接にペンや指で指示し操作できる) が可能になった。90 年代の半ばになって、大型の研究予算を獲得でき、日立製作所や富士通と共同で、手書き文字認識、ユーザインタフェース、アプリケーションの研究開発に集中できた。小型のタブレット (スマホの原型) から大型の電子ボードに至るまで、それらを実装して楽しんだ。手書き文字認識は富士通が実用化した。直接指示・直接操作は違和感がなく、大型のボードを使えば聴衆の注意も集められる。しかし、画面が大きいと手が届かないし、体や腕が画面を遮ってしまう。一方、画面が小さいと何度もスクロールしないといけない。そこで、小



電子ボードで対戦型漢字パズルに夢中な子供達 (1997 年頃)

画面にはタッチスクロール、大画面には小さい動きで大きく動かす「マジックハンド」のような伸びるポイントを含めて一連のユーザインタフェースを提案し、米国で特許として権利化できた。

4. 試練のとき

このプロジェクトでは多くの成果を上げることができた。しかし、マーケットはなかなか広がらず、企業も次第に研究を縮小あるいは撤退していった。80年代半ばと90年代半ばにはタブレットに関わる研究開発のブームがあったが、期待外れに終わるたびに研究者は減り、ますます萎んでいった。

弱小研究室ながら大手企業や90年代にはマイクロソフトなども競争する場面もあり、それでいて、なかなかブレイクしないので、いつ上浮するかも分からずに水の下を進んでいるような気分だった。その頃、苦闘している自分と、それを見ている自分を持つようになった。そうすると冷静になれる。呂新吾の言葉に出会ったとき、すぐに好きになった。後年、奈良女子大学の書道部を指導しておられる田上早百合先生に書いてもらった書を居室に掲げている。

この言葉は、大きいこと難しいことに直面したときに、それを担える力があるかが見える。うまくいかないとき、あるいは、うまくいくときに懐の深さが見える...という言葉なのだが、この「見る」という字が看病の「看」であるから、自分を見守るということだと思っている。

ところで、高校時代は古文と漢文はまったくダメだった。というよりよく寝ていた。軟式野球部に入って、弁当を食べたあとは練習に備えて睡眠の時間だった。そんな人間が、こんな書を座右の銘にするのも人生の妙なのだ。高校2年生のときに右手首を脱臼し、軟式野球は時々練習試合に出るぐらいで終わってしまった。



呂新吾：「吟吟語」の漢詩

5. 実を結び始めた研究

10年程前、技術を実用化するために大学発ベンチャー・アイラボを設立した。日本初のワープロソフト「一太郎」で有名なジャストシステムを創業された浮川夫妻が新しくMetaMoJiという会社を興され、アイラボの手書き文字認識を採用してくれた。そして、サムスン電子に販売契約を結び、GALAXYに標準搭載された。今は手書きができるスマートフォンの9割ぐらいで標準装備され、タブレットでも半分ぐらいで利用されている。また、手書きは学習に向くので、教育アプリケーションでの販売も増えてきている。ユーザインタフェースに関しても、大学は先の特許を売却し、2010年度の大学特許収入ランキング1位になった。これは大学保有の特許で、売却資金の一部は工学部の学生会館の改装に活用された。

6. 転機

研究室を持ってからは仕事中毒だった。休日出勤は当たり前で、帰宅はいつも夜中になった。国際会議に出るために一か月に4回も海外出張することがあって、自宅に帰らずに成田から次の場所に行ったりしたこともあった。海外との情報交換が往復するのに郵便で2週間かかっていた時代から、電子メールで1日に朝と夜で2往復する時代になって、「ITは良い」とか言いながら、出張中でも朝と夜にメール交換する状態ではとても良いとは言えないと思い始めていた。

53歳のときに、文部科学省から赴任してきた課長さんに誘われたのがきっかけで週末の釣りを始めた。やり始めると体調も良いし、何より週明けがすがすがしい。産学連携センター長をしていたときに、月曜日に悪い報告も入る。ついイライラして、「もっと要領よく説明してよ」とか「どうしてそうなったか」とか言っていた。それを度々言うとう報告は遅れるし、言い訳の用意をしてから報告に来る。ところが、週末を楽しむようになって、鷹揚に構えて、「ふんふん」と聞き、「どうしたらよいと思う？」と尋ねられるようになった。その頃から、夜もそんなに遅くないうちに帰るようになった。

釣りに行くときは始発電車で行く。電車の1時間半は読書の時間。それに、1週間を思い返し、次の1週間に何をするかを考える。シャカリキに働いていたときは、半年ぐらいしてから方向が悪かったと気づくことがあったが、働き過ぎは見直しの時間が減ることで別のリスクがある。

仕事の仕方も変わった。若い頃は、今やっている仕事の途中で次の仕事が発生したとき、今の仕事を片付けてからと考えて、次の仕事はしばらく置いていた。今の仕事が多量伸びると、次の仕事への取り掛かりが遅れてドタバタになる。最近は、今の仕事を30分1時間休んで、その間に次の仕事に何が必要か、何を考えないといけないかのキーワードを書き出す。それができたら元の仕事

に戻る。人間の頭はすごいもので、そのキーワード出しから頭の片隅で次の仕事は始まり、食事のときとか会議でつまらない議論をしているときに、派生のキーワードや内容が思い浮かぶ。それを書き加えていく。釣りに行く電車のなかでもメモを書いて、戻ってきてから書き加える。こうしておく、今の仕事が終わる頃に、次の仕事の相当の素材ができている。取り掛かりが早く、漏れも少ない。

いかに仕事を合理的に集中してやるか。他にもやりたいことはたくさんある。そのために、仕事をだらだらしない。そうは言っても、先の仕事に予想以上に時間を取られたり、雑用や趣味に時間を使い過ぎたりして、次の仕事に取り掛かるのが遅れることがある。若い頃は、もうすこし早く始めていたらと後悔したが、この頃は、それまでの仕事や趣味に十分な時間がとれたのだから良しとして、残った時間で次の仕事もできたら2つのことが達成できるのだからと思って、それに挑戦するようにしている。

7. 天邪鬼のおまけ

●仕事はぶっつけ本番、釣りは予習復習を欠かさない

「先生、そんなこと言っていないですか」と言われて、「仕事はぶっつけ本番でもできないといけないということ」と答える。仕事は若いときからやってきて、体の芯に刻み込まれている。一方、釣りは50歳を過ぎて始めたので、釣りに行く魚種が替わるたびに、魚種ごとに復習しないと不安で仕方ない。それができるように釣り日誌をつけている。うまくいった誘い、食わせ方、合わせ方など。

仕事がぶっつけ本番かという、むしろ、その逆かもしれない。若い頃は締切りぎりぎりに徹夜で仕上げたり、発表の前日に講演スライドを用意したりしていたが、今は文書は1週間前、発表は4日前に準備を終えるようにしている。文書は数日空けて、2、3度読み直し、説明不足を補ったり、冗長な部分を除いたりする。発表は何回か練習する。すると、録画再生のような発表でもなく、また、大事なことを言い忘れることなく多少アドリブも交えてライブな発表ができる。いかに準備してきましたというような発表はしたくない。40年やってきて、これが一番効率が良い。

●釣りは科学

釣れないと、どうして釣れないかいろいろ考えて仮説を立て、仕掛けに工夫を凝らしたり、誘いのパターンを考えたりしてから釣りに行く。仮説は裏切られることも、それが正しかったかどうか分からずに釣れることもある。毎週釣りに行けると、毎週仮説検定していることになる。実際の研究は、検討や調査、準備などに何か月もかかり、仮説検定のサイクルも何か月、何年になる。それからしたら、釣りでは毎週頭を使っていることになる。

8. 釣り自慢

2016年1月13日は教授会の日だったが、家内の誕生日であることを優先し、オニカサゴの船釣りに行った。サンケイスポーツ（サンスポ）の記者も同乗していた。船が良いポイントにいくと、彼も釣るのが当方のほうが大きい。写真を撮ってもよいかの問いに、もちろんOKした。記事は20日のサンスポの釣り欄（紙面の上半分）を独占した。もっとも、魚体が綺麗な赤なのでカラーで載ることを期待していたのに白黒だった。スポーツ紙は経費削減でカラーは半分ぐらいだ。それもそのはずで、その日の新聞は1面から3面までカラーでSMAP解散を報じていた。これを釣り友に話すと、「中川さん良かったね、いつもの何倍もの人が新聞を買って読んでくれたよ」と言ってくれた。何事も捉えようなのだ。電子版はカラーなのでご覧下され。下世話な日経産業新聞とか日刊工業新聞に名前の載るヤツはいっぱいいるが、栄光あるサンスポに載るのはオレだけだとドヤ顔をしている。



電子版掲載のカラー写真
(2016.1.20). 1.2Kg

9. 最近の研究

現在は、手書きの日本語や英語、そして数式の認識や文字と図の分離なども研究し、手書き答案の自動認識と自動採点に挑戦している。記述式の問題は選択式と違って、生徒が本当に理解しているかどうか分かる。それをコンピュータが認識して採点できれば、生徒はすぐに採点結果を受け取って復習できる。先生の時間にも余裕ができる。多少起こりうる採点誤りは先生に訂正してもらえばよい。採点支援という方法もあって、解答をグループ分けしてから採点者に渡し、採点ミスやばらつきを減らすこともできる。

大学入試センター試験の後継である大学入学希望者学力評価テスト(大学新入試)で記述式問題が導入されることが計画されたが、採点の問題などで取りやめになった。しかし、パターン認識は着実に進歩し、車の自動運転が実用化しようとしている。自動採点も十分に可能性がある。採点誤りがあったらという反論もあるが、受験生も採点を確認できるようにしたら採点の透明性は上がる、人による採点と併用し、人だけによる採点より安全性を高めることもできる。マークシートは考えることより選ぶことを習慣づけ、まぐれ当たりを許容し、転記ミスもある。

もう一つは、古文書や平城京などから出土する木簡の自動認識と解読にも取り組んでいる。中世の変体仮名の認識コンテストでベトナムからの留学生が作ったシステムが 1 位になったりした。彼らは、昔のベトナムの古文字(チュノム)の解読システムも作っている。ベトナムはフランスによる占領後はアルファベットになったが、それ以前は漢字に基づいた文字が使われ、日本と同じようにベトナム固有の文字も作られて、千年ほど使われた。その 1 割しか現代語に訳されておらず、読める人が世界で百人に満たない。これらの研究では、最新の人工知能をフルに使っている。

10. おわりに

70 年代から始めて、時代の流れにも翻弄されながら 30 年以上経て成果が認められ、ささやかな褒章も頂戴できた。『弱みを強みに 手書きをデジタルに』(OROCO PLANNING、2017 年)という本も書いた。手書きがアナログでなくなる日が来ることを夢見て始めた研究だったが、つい最近までタブレットがこんなに使われるようになるとは思わなかった。この進歩

に幾ばくかの貢献ができたのは、ともに過ごした学生を始め、関わってくださった方々のおかげである。そして、最後は時代に恵まれたのかもしれない。



あとがき

上記の本を書いて、城南高校 同級生の船越健介君(三井住友信託銀行 OB)に送ってあったら、最近になって『渦の音』の先輩寄稿欄に一文書かないかとお誘いを頂いた。彼とは大学時代によく一緒に麻雀をした。高校 2 年のときに同じクラスで、当方が教卓の真ん前の席でよく寝ていてもバカにせずに付き合ってくれた。とくに世界史は睡眠の時間で、中間試験の前日に教科書を持ち帰るのを忘れ、授業中の記憶も全くなく、問われた会議名はすべて「井戸端会議」、人名は担任で世界史の柳田先生のニックネームである「チャンドラ・クシダ」と書いた。たまたま選択問題が 1 つ 2 つ当たって 100 点満点中 5 点だった。当然、期末試験は頑張った。

20 年ぐらい前にチェコのプラハに行く用事があり、カレル大学(1348 年設立)の学位授与式を見る機会を得た。学長が古式ゆかしいアカデミックガウンを着て、ヤン・フスの銅像の前で学位を授与していた。後年、ドイツのコンスタンツ湖畔に行くと、そのヤン・フスが新教を興した罪で、一週間の火炙りの刑に処された墓に遭遇した。その話を船越君にしたら、「中川から世界史の話を聞くとは思わなかった」と言われて、自分でもおかしくなった。人生、こんなものである。

歴代の同窓会事務局長と私

前事務局長 高木純一郎(昭和 36 年卒)



「渦の音クラブ(関東支部)」総会での高木純一郎先生(右) ロナウイルス感染症拡大により、すべて中止、何も書き留めるものはありません。昨年三月現同窓会事務局長船越隆子(昭五十一年卒)さんの着任により、私は九年半の任期を終え、退任することになり、大きな肩の荷を下ろすことが出来ました。

私は、四代前からの事務局長板東育雄先生(昭五年卒)、河野久之先生(昭十七年卒)、岡島安次先生(昭十八年卒)、坂野榮一先生(昭三十四年卒)、どの先生とも交流がありました。個人的つながりや、同じ職場(城南高)での同僚としてのつながりです。この際その人柄や思い出などふり返って書き留めておきたい気持ちに駆られ筆を取った次第です。

事務局長として知っている最高齢者は、板東育雄(昭五年卒)先生です。先生との出会いは中学一年生の時です。中学へ上がっても遊んでばかりいた私を見かねた母親が聞きつけ、板東先生宅へ友達二人で行く様になりました。八万中学校の西に大きな住宅団地が開発され、その一角が板東先生宅です。当時先生は富岡西高校へ勤められていました。午後七時～九時まで教科書や問題集を解いていました。解けなくてもすぐに教えてもらえず、よく考えさせられました。これが力になって、中学では数学は良かったです。城南高校入学後もしばらくお世話になっていましたが、突然やめてしまいました。大学入学後には塾の仲間達とご馳走していただいたのを覚えています。



「昭五会」での板東育雄先生(左)

渦の音五十九号の最後の方に「甲子園出場で同窓会活性化」と題して駄文を載せさせていただきました。その末尾に同窓会の事業については次回にまわす、とあります。

本年度においては新型コ

年記念会館(図書室、茶道室)の一角に同窓会室があり、そこで板東先生と国見美枝子(国見武昭三十四年卒の母)さんが同窓会名簿の住所や電話番号の確認を手作業でやっているのに出合いました。量も多く大変な仕事を根気強くしていたのに敬服しました。

私は昭和四十九年四月に、徳商より母校城南高校に転入しました。そこで板東先生と久しぶりに巡り合うことが出来ました。当時旧徳中城南高等学校創立一〇〇周年記念事業に向けての募金活動に学校あげて取り組んでいました。私は渉外課の一員として募金全体の会計に組み込まれ、出納帳の記入や各年次の代表者からの現金受け入れ、郵便振込、銀行振込の整理を授業の合間に一人でやっていました。

ある日曜日、板東先生の依頼により、昭五会の奥田元男(元徳商校長)、第五代同窓会長元山貞雄氏の三人を乗せて、同期の家庭へと募金に廻りました。三人の車内での会話は、実に楽しいものでした。

私の知る同窓会の事業は、募金活動への支援、総会開催と同窓会名簿作成、どれも重量級のもので板東先生一人がこなしていたようです。

当時の同窓会総会は、お盆の間に西新町の経済センター五階ホールで開かれていました。受付には母校卒業の教職員が駆り出され、中でも進学事務の工藤陽子さんが先頭で手ぎわよく処理していたことが頭に残っています。総会中は外でしばらく待機し、屋近くなると別室で昼食がいただけました。

総会後の懇親会では、杉本春幸氏(昭二十六年卒)の名司会ぶりが印象に残っています。声も大きくテキパキと進め、ニュートクシマの楽団伴奏に合わせ次々と指名し歌声が続きました。

板東先生は実直でコツコツ根気強く仕事を成し遂げる力を備えた方で、明るく人なつこい人柄と思います。退任後も総会に出られ、奥田元男さんと、睦まじくされていました。

さかのぼって、同窓会報創刊号(昭三十七・六)～四号(昭四十四・十二)によると、同窓会の運営については母校卒業の現職員が分担して任務に当たっていました。昭和三十二年より美術の藤田為一先生(昭三年卒)が事務局代表として、退職する昭和四十四年三月まで十二年間務めました。

その間、母校卒業の河野久之先生、宮本駿先生等が協力していました。当時の総会は城南高校体育館講堂で開かれていました。その後会場は西新町経済センター、ホテルへと移っていきました。

藤田為一先生の退任に伴い、昭和四十四年四月より数学の板東育雄先生が引き継ぎました。翌年昭和四十五年三月の退職を機に専任として事

事務局に勤められ、前述の様な同窓会名簿の管理、総会の開催、同窓会報の発行とほとんど一人でされていたようです。

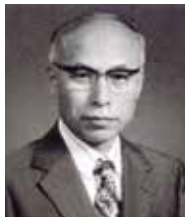
会報三十七号（昭六十二年七月二十日）では、昭和六十年四月に河野久之先生に引継がれましたが、同窓会名簿作成が残っていたため、翌年三月まで勤務しています。

板東先生は、一〇〇周年、一一〇周年と大きな二つの記念事業に参画されたことになります。先生は若い頃には歌声喫茶で歌をうたっていたし、退職後事務局の合間に、城南高校補習科（八十周年記念館の中）や旧の教育会の予備校（徳島城公園の東）でも教えられていました。また小豆島に別荘があり時折り出かけたり、また俳句にも心酔し複数冊の句集を出しているようです。このことについては最近長女吉原美根子さん（昭三十五年卒）からお聞きしたところです。

次に河野久之先生（昭十七年卒）。本校勤務は、昭和二十四年四月より昭和六十年三月までの三十六年間の長期にわたり勤務されました。先生のお顔は在学中から知っていました。私が転入してから、ほとんど化学準備室におられ、個人的な話し合いはありませんでした。昭和五十五年四月、三〇八 HR 担任時、副担任としてお世話になりました。



3-8H 正担任高木純一郎先生



副担任河野久之先生

先生は長期に渡り同窓会事務局のお手伝いをされ、様々な場面に出合っていて、母校の歴史についても実に詳しく知っていました。正に旧徳中・城南高の生き字引的存在でした。年次代表者の氏名やその周りのことを熟知していました。事務局には最適者だったと思います。外見については額から頭の中央部にかけて若い時から輝いていました。事務局長時もほとんど変化には気がませんでした。

河野事務局長時代に色々な改革があったようです。まず卒業して三十年目の学年が同窓会総会の幹事を担当することとし、受付、講演会の講師の確保、総会後の懇親会の司会進行や、アトラクションの準備まで担わせる仕組みをつくられたと思います。

因みに私達 36 会はアトラクションとして人形浄瑠璃とハワイアンバンドという異色の組み合わせで会場をなごませました。この内容は河野先生に頼まれ会報四十八号（平成三年十二月）に書いています。同窓会名簿作成に関しても、会報四十七号（平成三年七月）の事務局だよりの中にメンテナンスサービス紹介（姫路の出版会社と五年契約）とあり、これが現在お世話になっているサラト(株)でしょう。一九九五年（平成七年）発刊の創立一二〇周年号の名簿の発行先は株サラトと記されています。

河野久之先生は平成四年の秋、急に病を發せられ、事務局長を辞されました。岡島安次先生に引き継がれたものの細部がよく分からないので、次年度に総会幹事を担当された昭 38 会々長の平井良明氏は困惑していたようです。



岡島安次先生

次は岡島安次先生（昭十八年卒）。本校勤務は昭和四十七年四月～昭和六十三年三月です。前任校徳島農業高校（現城西高校）から転入されました。教科（物理）指導においては随分苦労されたと推測されます。

先生は生徒達に怖がられていました。授業は時間前に向いて、理科室では決められた通りに着席していなければ怒られる。夏には、実験室の大きな机を歩きながら授業をしていたとか…。

施設課長の時、清掃時に校舎を巡回し遊んでいる生徒を見つけると、こっぴどく叱りつけていました。また先生はしゃべりが早くしかもなめらかで調子が良い。授業の様子をテープに取り自宅に持ち帰り皆で聞いていた生徒もいました。先生のことを十分ご存知ない生徒が遅れ、その折に「人を殺すのと比べたら」遅刻はたいしたことではないと返した者がいた。その後ずい分しぼられたようでした。渦の音の「学級日誌抄」があり、「物理の授業はただ震えるのみ」と書いてあるのを見たことがあります。

職員会議では仕事が身にふりかかったり考え方が異なるときは、上に

向かって反論することはよくありました。同僚に対しては関係が悪くなるような事は聞いたことはありません。酒の席などは特に楽しく付き合えました。

外部方に対しては懇懇無礼とまでもいかなくても、えらい丁寧な話しぶりの時がありました。特に事務局長に就任してからは「まことに誠実な岡島先生」と表現する方もいました。

平成十二年中筋会長は鳴門市の賀川豊彦記念会館設立に力を入れていました。当時の内藤校長にも協力を求めている、教職員にも岡島事務局長より協力依頼の説明をいただきました。

岡島事務局長は、後任として当時現職の坂野榮一（昭三十四年卒）先生と話ができていたようでした。坂野先生の退職（平成十三年三月）を待って四月に着任しました。



職員室での坂野榮一先生

次は坂野榮一先生（本校在職期間昭六十三・四～平成十三年三月）。先生とは私が他校へ転出する前の二年間と最後の六年間です。英語を教えられていました。初対面の頃は話されている言葉が分かりにくく慣れるのに時間がかかりました。私が再度転入してからのこと、ある女生徒二人が、先生の話している日本語がよく分からないと言うので、とっさに、坂野先生はおじゅっさん（僧侶）だからお経がよく分かるようでは值うちがないんだと説明したら、げげんな顔をして立ち去りました。

先生はお酒が好きで一緒にすることもありました。私は酒野先生などとヒヤカスこともありました。一次会のあとはスナック廻りが得意で一軒での飲む時間も短く、落ち着いてじっくり話す間もなく次々とはしごとなりました。飲み過ぎて帰宅し妻にスナック嬢の名前を呼んだという大失敗をしてしまったという話を聞いたことがあります。

私が現職のとき、同窓会理事会の受付の依頼があり快諾し、お手伝いをすることがあります。その折に、次の事務局長は君だよと言われましたが、その時は、断りました。

その後坂野先生の在任中、平成十五年・十九年・二十一年の同窓会総会の集合写真が見つかり、その間三回総会に出席したことが確認できました。

坂野先生は平成二十二年五月下旬に脳出血により倒れたので、その後九月まで事務局不在のまま三か月間空白の状態でした。この年の総会担当年次代表の笠井洋氏（昭五十五年卒）は苦勞されたことでしょう。九月十一日、木村会長より私に事務局長を引き継いでほしいと依頼があり、三日後に受諾しました。

同窓会創刊号にさかのぼって調べた結果、次のようなつながりがわかりました。

昭和三十二年四月より四十四年三月の間（現職のまま）

・藤田為一先生が同窓会事務局長十二年間

本校卒業の各先生方が分担して協力していた。

昭和四十四年四月より昭和六十年三月まで十五年間

・板東育雄先生が同窓会事務局長

昭和四十五年三月退職と同時に専任として事務局へ勤務、

退任後同窓会名簿完成のため昭和六十一年三月まで仕事をした。

昭和六十年四月～平成四年の秋まで七年半

・河野久之先生が同窓会事務局長

平成四年の秋～平成十三年三月まで八年半

・岡島安次先生が同窓会事務局長

平成十三年四月～平成二十二年五月まで九年二か月

・坂野榮一先生が同窓会事務局長

平成二十二年九月～令和二年二月まで九年半

・高木純一郎先生が事務局長

令和二年三月～

・船越隆子さんが事務局長

※坂野榮一先生が、令和三年一月二十四日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈りいたします。

新居格の徳中時代の処女演説

岡山大学名誉教授 新居志郎



ニイイタル
新居 格（以下格）は私の父・厚の兄であり、この兄弟は賀川豊彦（以下豊彦）の従兄弟である。豊彦は格と同年であったが、小学校に一年早く入学した早く卒業したので、旧制徳島中学（以下徳中）でも豊彦が格より一学年上の級に進んでいる。

格は明治 34 年に入学、同期生に鳥養利三郎（後に京大総長、文化功労者となる）や天羽英二（後、駐スイス公使、駐伊大使、情報局総裁など歴任）がいた。

格は自らを生来臆病者であるという。徳中三年生のとき、恒例の弁論大会に「悪者の友」の演題で登壇の予定であったが、間近になり緊張感に耐えかねて尻込みし、当日は病気と偽って欠席した。

四年生になって今度こそと意を決し、「わが千行の血の涙」の演題を出して申し入れた。この題は町田桂月の著者のなかにあった詩の一節から思いついたという。

格は生徒仲間の人気者であつたらしい。彼には天性の明るさがあり、話にユーモアがあつて面白かつた。豊富な話題は彼が多読家であることにも因る。新町橋の袂にあった黒崎書店から次々に本を買って濫読した。なかでも桂月の名文を好んだ。また高山樗牛の愛読家でもあつた。さらに社会主義の文献も漁り読みこの思想に傾倒していた。

このように文学のみならず社会主義に興味を持つ格がどのような弁舌を弄するのか、同輩達の好奇心も手伝って「新居がやるらしい」と演説の前人気は上々であつた。

さて弁論大会当日となった。会の進行係は豊彦が務めていた。いよいよ格の出番となる。紙がめくられ大きく書かれた演題と氏名が披露され、格が指名されるや否や講堂を埋める生徒から喚声と拍手が沸き起こった。格は席を立ち大手を振り、ゆっくりゆっくり独特の歩調で演壇に向つた。拍手は止むことなく続く。壇上に立った格は胸を張り声を上げた。

「諸君！ 緑のグラウンドで生徒が円座を作って話し合っている場合、それが教師の悪口でないことはほとんどないのである。しかし子供が悪いのは決してその子の罪ではなく、親の罪である。生徒が教師の悪口を言い合うのは、所詮教師同士が互いに悪口を言い合っているからに他ならない」とまず前提の言葉を述べると、拍手と喝采が起った。進行係の豊彦は慌てて困惑の表情を浮かべながら弁論注意を意味する鈴を鳴らした（言論の自由の制約があつた当時、講演会場などで演者が危険な発言をした場合、居合わせた官憲が弁論注意の警告を発した。徳中の弁論大会では、弁士の過激な発言に対して進行係が注意を喚起した。）。

次いで弁論の対象は個別の教員に向けられた。「全校生徒の尊敬の的である校長は、お鼻の先が赤いので日の丸弁当のあだ名があります」と述べると、また一際高く拍手喝采が上がり鈴も鳴った。

話は校長から教頭へ、さらに一般教師に及んでゆく。各教師についてはあだ名を冠して呼ぶか、もしくは特定科目担当の教師として指し、決して実名は出さずに次々に教師の悪口を語り攻撃した。

話が進むにつれ格の弁舌には一段と油が乗り、声を張り上げ身振り手振りに激しさが加わった。教師の常日頃の癖や、特に授業中の特徴のある仕ぐさを挙げ、またそれらを真似て演じて見せた。

学期末試験の折に難解な問題を出し、あるいは評価や採点を厳しくして多数の落第者を出し、むしろこのことに優越意識を持って存在感を示そうとしているかに思われる教師に対しては舌鋒鋭く批判した。

このように、実例を挙げてさんざん教師達を攻撃した後で、「しかしながら、只今語ったことは、流れも清らかな富田川に影を宿す本校のことではないのでありますが、……」と述べると、校長がすっと立ち上がった。怒りに震える声で壇上の格に向つて呼びかけた。

「弁士は本校のことではないことを何故弁じようとするのか。何の意図か。弁士演説の中止を命じる」

校長のお顔は紅潮していた。

この弁論大会において格が自らの弁論にいかにも夢中になっていたか、また会場全体がいかにも騒然としていたかについては、格が当時を回顧して綴った随筆「処女演説の経験」から伺うことができる。その該当箇所は次に示すとおりである。

「校長は大部分興奮していたらしかった。

賀川豊彦が当年五年生で弁論部委員で私の演説が過激に亘ろうとする度毎にベルを鳴らして注意したが、そんなことを聞き入れずに私は喋った。大講堂で聴衆は六百人位、一語一語が喝采でその騒々しいつたらなかった。」

格は弁論を中止され、怒り心頭に発した校長を前にやむを得ず降壇した。その直前、次の言葉が胸中に沸き起こったが、それを発することはもはや叶わなかった。

「であるから、ああわが千行の血の涙、塵の巷にそそぐとも如何ともしがたいではないか」と、演題の言葉を引き合いに出し、慨嘆の弁を以て結語としたかったのであつたが。

登壇時と同様に大手を振り、この時も拍手とやんやの喝采を浴びながら、ゆっくりと自席に向つた。

徳島毎日新聞は早速弁論大会の模様を伝えた。社説に「徳島中学不穩の兆あり」と掲げて、新居格のなせる演説などは……とこきおろした。他方学校では職員会議を開いて審議した結果、格は校長と教師を弾劾した廉で、学校騒動の扇動者のように認められて停学に処せられた。なおこの処分を受けて格は一年遅れの卒業となった。

以上が格の処女演説について、私が現在知る範囲での事の次第である。上記の文中末梢的に挿入した私の創作文の箇所は別として、演説の本筋そのものはおよそこのようであつたと考えている。

なお格の演説については、賀川豊彦に関する一、二の伝奇小説においても面白く取り上げられている。ただし格が弁論中思想的に先鋭で、またよらず過激な言辞を弄したこと、またさらに壇上で弁論を阻止しようとする教師と烈しくもみ合ったことを伝えているが、これらは小説上のフィクションと見做しうる。

後日談になるが、格は処女演説そのものは大出来だったとしており、案外満足しているふしがある。しかしその他では散々の失敗だったという。とにかくその後の十数年間一切演壇に立つことはなかった。この理由について、一つの随筆では処女演説に懲りたわけではなく旧制第七高等学校時代に雇った神経衰弱症のためとしているが、他の随筆では同演説に懲りたせいとしており両記述には齟齬がある。いずれにせよ格の気持のなかには負に働く処女演説の苦い余韻が長く残っていたのではなかろうか。



新居格氏の著書

後記

私は中学入学と同時に開業医の父を、また医学部専門課程に進学した年、二十歳の折母を失った。母の没後両親の残した書類などの整理中一通の手紙に目が止まった。それは牧駿というお名前の方の差出人で、亡父宛のかかなり以前の便りであつた。その方が父の徳中時代の友人であることは生前の母から聞いて知っていた。日々寂しさの中にあつた私は、誘われるかのように当時の新居家の模様をしたためた手紙を牧氏に差し送った。

その後間もなく牧氏からお返事が届いた。主文にはまず父の思い出が綴られ、次に続いて文面を占めていたのは格の演説についてであつた。そこで私は初めてこの事実を知った。同時に格の件がいかにも深く牧氏の脳裏に刻まれているかを察することができた。

その当時は彼等の中学時代から既におよそ半世紀の歳月が流れていたにもかかわらず、牧氏の記憶は鮮明であつた。同氏によって伝えられた弁論大会の情景は、その後の長年月私の心の中で温められ、貴重な記憶として留まった。そして最近になりこの記憶を書き残しておきたい気持ちに駆られ、その実現を図ることになった。

そこで格の著述「街の拋物線」のなかの前記随筆「処女演説の経験」を骨組とし、これに牧氏の情報を挿入して肉付けとし文全体のおよその輪郭を作った。さらに教師を批判糾弾したくだり並びに末梢部に私の創作文を交えて全文を完成した。これが先に呈示した本文である。

本文の冒頭で述べたように、豊彦と、従兄弟の格、厚の兄弟は、共に同じ世代の徳中生であつた。この事実は徳島中学校城南高校百年史（88 頁）に掲載の東星学院の塾生と題する写真に彼等が登場していることによっても示される。

天羽英二は上記の百年史のなかで、「徳中の五年間は私の半生中最も愉快なる

思い出である」と述べている。この言葉のように、往時の徳中の生徒達は青春の生気に満ち、自由闊達な中学生生活を送っていたことが伺える。

また、英二が学んだ時期の卒業生からも数多くの有為の人材が輩出している。恐らくこれら人材の萌芽は彼らの中学時代に切磋琢磨を通じて形成されつつあったものと考えられる。

現在の城南高校においても、生徒達は澁刺として青春を謳歌していることと拝察する。夢を追いつつ未来に向かって大いに羽ばたいてくださるよう期待し、またお祈り申し上げて文を了える。

新居志郎氏：新居格氏の甥。1932年、鳴門市撫養町生まれ。鳴門高校から大阪大学医学部、同大学大学院修了。医学博士。専攻はウイルス学。岡山大学及び新見公立大学名誉教授。瑞宝中綬章、岡山県文化賞などを受賞。

新居格氏：1888年、板野郡撫養町斎田（現鳴門市）生まれ。徳島中学（現徳島県立城南高等学校）、七高を経て、東京帝大を卒業後、読売、大阪毎日、東京朝日の各新聞社で活躍。退社後、数多くの雑誌に執筆し、著作も相次いで刊行。「左傾」「モボ」「モガ」などの造語を生み出す。1920年代半ばからはアナキズム陣営の先頭に立って評論活動を行う。協同組合運動（生活協同組合で知られる賀川豊彦は従兄弟）にも関与、またパール・バックの『大地』等を翻訳するなど幅広い活動を見せた。戦後すぐ東京都西部生活協同組合連合会の会長に就任したほか、47年には日本一の文化村を目指して杉並区長に立候補し当選。しかし健康がすぐれず、区議会や行政にも失望してわずか1年で辞任。51年に脳溢血のため63歳で永眠。
（『杉並区長日記 地方自治の先駆者・新居格』（虹霓社）より抜粋）

尚、今年の8月12日（木）～9月20日（月）に、徳島県立文学書道館にて「文学特別展 モボ・モガの生みの親 新居格の仕事」が開催される予定。

恩師・玉有崇峰先生

旧職員書道 隅田 英二（昭61～平2）（昭和52年卒）

掲載の作は、恩師・玉有崇峰（たまありすうほう、本名は輝二）先生の書です。先生は昭和37年から54年まで、18年間にわたって城南高校で書道の教鞭を執られました。亡くなられてもう40年あまりが経ちますので、ご存じの方は還暦近くになるのではないのでしょうか。この場をお借りして先生と書を少し紹介させていただきます。



玉有 崇峰先生

先生は、ご健康で顔色はよく、背筋はピンと伸びて、そのお声はいつも信念にあふれていました。小柄でありましたが、その全身から威厳が感じられ、先生と呼ぶにふさわしい方—教育者であったと思います。私は初めてお会いしたときからそう感じ、そのことば一言一言が私の心に響きました。

教育者としての信念、そして書の分野においても同様に信念をお持ちでした。

先生は若くして書の才能を認められ、昭和の三筆の一人である巨匠・手島右卿先生より上京を促されたほどですが、30代半ば以後は書壇から離れ、“作品を競う”公募展にはまったく出品されませんでした。また流派といったグループにも属されず、さらに誰にも師事されませんでした。「書はよくても、人として師事すべき方に出会わなかった」と言われたことがあります。書だけでなく、その根っこにある“人”を見られていたわけです。そういえば、我々の指導にあたっても、書の技法だけでなく、内面までよく見透かされたものです。それゆえ作品の批評を受けるときは緊張して、何か見抜かれぬかと恐かったことを覚えています。

このように申しますと、厳格で近寄りたがたい印象を持たれるかもしれませんが、寛大で懐の大きい先生でもありました。部活においては、われわれ生徒の意志を尊重して本当に自由にさせていただきました。押付けることは一切無く、練習や取り組む題材は自由で、部員が「これを書きたい」と言えば、解説しながらすぐに手本を書いてくれました。また私が思うように書けなくて四苦



【徳島県立文学書道館所蔵】

八苦していると、何度も何度も手本を書き直しながら助言していただきました。生徒一人ひとりの人格を尊重して、“自主自立”、人間形成を第一に考えられた先生でした。

さて、掲載の作品「点燈」（点灯）は、昭和47年、先生46歳の書です。お人柄を象徴するかのような書で、美しく、明るく、すがすがしく、清潔感あふれる作です。見ていますと心が洗われるようで、すばらしい書とはこういうものをいうのでしょうか。技巧に優れただけの書は、感心しても感動しないものですが、先生の書は感動する“本物”だと思います。

とは申しまして、この作には書家・玉有崇峰としての高い技巧と工夫が配されています。「点」字は、白を生かすべく滲みも計算に入れながら一点一画を絶妙の位置に配し、「燈」字は、疎密（広い部分と狭い部分）を作って「豆」部を開放的にするとともに右払いを美しく伸びやかに強調しています。また「火」部の2画目から3画目は筆をひねりながら筆先を絞り込むようにして書かれています。落款（署名）も作品の一部として十分に配意のうえ、余白に見事に揮毫されています。筆はおそらく中国の名匠・戴月軒の柔毫長鋒筆で、私などには使いこなせない代物です。

この作には、そういった技巧や工夫が随所に散りばめられているのですが、決してそれらを前面に押し出してはいません。自然な運筆の中にそれら全てを包み込ませているのです。先生にとって書というのは、ご自身の心を表現するものであって、技巧を主張する書家の書などとは一線を画すものであったと思います。この作が晴れやかで品格があって、先生ご自身そのままのように感じられるのは必然なのでしょう。

昭和54年、私が大学2年の折に、先生は不慮の事故で亡くなりました。これまで様々な方に教えを受けましたが、城南高校で先生から学んだ有象無象の教えは、今なお私の羅針盤として、方向を見誤らぬよう指し示してくれています。

城南を愛せたらどうか

旧職員化学 泉 泰正(平 17 ~ 28)(昭和 60 年卒)



同窓会事務局の方から、「長いこと勤めていたのだから、何か書くように」と依頼を受けて、文を書くことになりました。初めは何を書くか悩んで書き始めることすらおぼつかない状態で、提出を延ばしてもらったくせに、いざ書き始めると、次々と浮かんでくる記憶に圧倒されて、收拾がつかなくなってさらに提出が遅れてしまいました。事務局の方にはご迷惑をおかけしました。

書き上がったものを見てみると、「中の人」でなくなった気楽さから、偉そうなことも書いております。いい歳をして若気の至りということで、どうか

かご容赦ください。

また、城南高校在職中にお世話になった先生方、迷惑をかけた生徒の皆さんに、何のお礼もせずに飛び出してきてしまったとの後悔も、蘇ってきました。この場をお借りして、感謝とお詫びを申し上げます。

さて、事務引き継ぎのために、城南高校を訪れた日のことです。

転任教員が4月1日の何時を集合にするかが話題になった時、校長先生が、辞令交付式の終了時刻を県教委に問い合わせました。その時、県教委の担当者が、教育長の訓示がどれくらいかかるか分からないので、交付式の終了も何時になるか分からないと答えたようで、校長先生は、それでは学校の予定が立たないではないかと、語気を強めて担当者に明確な回答を迫るのでした。

「県教委の担当者=偉い人」というイメージを持っていたのもですから、その偉い人を相手にコテンパンにやってしまう校長先生の姿に、これはエライ学校に赴任することになったものだ、とかなり萎縮しそうになったのです。

実際に赴任してみると、何度かお叱りは受けたものの、勝手なことばかり言う割に仕事も遅い私のような教員にも先輩方は大変寛容で、SSH課題研究の指導では、自分の方が学生時代にもどったような奔放な気分で、生徒と一緒に研究を進めることができました。

応用数理科の生徒で、数学と情報科学の2本の課題研究を同時進行で行って、そのどちらかが全国のコンクールで上位入賞を果たせたときは、直接指導にあたられた数学科の先生にはご負担をおかけしましたが、伸びてゆく生徒にとことん付き合う、城南高校らしい指導方針が、最高の形で結実したように思います。

城南高校らしさと言えば、意外なところに「らしさ」ってあるものだったエピソードがあります。

140周年記念事業で、記念講演の講師にお呼びした立木義浩さん、壇上に上がるなり、若干興奮気味におっしゃるのです。

「城南らしくていいねえ。城南はこうでなきゃ」

何が城南らしかったのでしょうか。すぐ説明してくださったところでは、講演用のスライドを映すスクリーンが小さかったの、ステージ背後の壁に映していたところが、城南らしかったとおっしゃるのです。立木さんの卒業から50年を経て、校舎も建て代わり、制服も新しくなって、それでも変わらない城南高校らしさのことでした。

城南高校で培った城南高校らしい指導は、転任してからでも仕事に役立っているように思います。

私が現在在職しているのは、工業科と水産科が設置されている、徳島科学技術高校です。専門高校ですので、学科(コース)に分かれています。工業科では、情報科学コースと環境科学コースが、専門高校枠と呼ばれる入試制度を主に利用して、4年制大学への進学を目指しています。最近、30人を超える国公立大学への進学者も出るようになりました。

専門学科の生徒ですから、元々数学や理科に対する苦手意識が少ない、専門科目では大学2年生程度の内容で毎週口頭試問を受けているので面接で高度な内容を問われても臆せずに対応できるなど、様々な理由は考えられます。ただ、専門高校らしい進路指導に、その力の源泉があるように思います。

徳島科学技術高校では、1年生のうちから、自分が将来何を専門にしたいのかを考えて、大学の公開講座や地域のイベントに積極的に参加し、志望理由を固めていきます。2年生の学年末くらいには、高校で学んだこと、大学で学びたいこと、社会に出てから実現させたいことが、簡単ではありますが、言えるようになっていきます。志望大学も、自分の将来の目標が実現できる最短最善のルートであるという確信のもと、鉄壁の第一志望として、受験に臨んでいきます。第一志望の持つ力は驚異的で、入試直前の数週間であらゆる実力を伸ばして合格していく例は枚挙に暇がありません。

専門高校枠での受験は、模試やセンター試験(共通テスト)の出来による「輪切り」を考えなくてもよいがゆえの、恵まれた進路選択のおかげだということではでき

う。

とはいえこれは、生徒の第一志望にとことん付き合うという、城南高校の指導にも通じるものがあると思うのです。

城南高校で私が担任していたクラスでも、何人もの生徒が、D・E判定から逆転の合格を勝ち取っていきました。塾の先生が「この成績で受験にゴーサインを出すとは!」と呆れていた、という話も何度も聞きました。もちろん逆転が叶わずに涙を飲んだ生徒の方が多かったのです。

しかし、挑戦もせず、従って気乗りのしない受験勉強で、安全策を取った受験で合格し、入学してからミスマッチを感じるくらいなら、納得のいく受験をしてほしいというのが、私の願いでしたし、はるか37年前に私たちの受験に接してくださった当時の城南高校の先生方の願いにも通じているのだと信じています。

偉そうなことを書いていますが、今でも痛恨の念にとらわれてしまう、失敗もありました。

城南で最後に担任したクラスの生徒で、目指していた国立大学が推薦入試で不合格となり、一般入試に挑戦するかどうかというところで、滑り止めのつもりだった学校への入学を選び、国立大学の一般入試は受けないことにした生徒がいました。出願した以上は苦しくても受験するべきか、自分の気持ちに正直に受験を辞退するか、散々悩んで、悩んだ末に、担任である私のところに、助言を求めにきてくれたのでした。

もちろん、そんな苦しい受験はしなくてよい、というのが当然のアドバイスだったのですが、そこで余計な一言を発してしまいました。

「(国立大学に出願したのに受験しないという)わがままを言えば城南高校の信用に傷がつくのではないかと心配する彼女に、つい、「そんなことで城南高校の信用は揺るがない」と言ってしまったのです。言ったものの、すぐ後で考え直しました。城南高校の信用が何によって築かれたのか。自主・自立の校風がどこで試されるのか。それがわかっていれば「そんなこと」なんていうことばが出るわけがないのです。

「わがままではない。生徒が自分で選んだ大事な選択だ。それを、どこまでも尊重し続けてきたことで、城南高校は現在の信用を築き上げてきたのだ」
なのです。

彼女がこの文を読んでいるかどうかはわかりませんが、どうか、自分の選択に自信と誇りを持って、その後の進路を切り拓いていることを祈るばかりです。

長くなってきましたが、もう一つだけ、書かせてほしいことがあります。11年間の城南での勤務の間、ずっと顧問をさせていただいた、ハンドボール部のことです。

ハンドボールは、自分が選手としてプレーしたことがないのはもちろん、集団スポーツの運動部顧問はまともに務めたことがないので、1・2年目は、練習からは逃げ回ってばかりでした。

そんな2年目のある日、キャプテンから、「顧問なんですから、練習に顔を出してください」と言われ、恐る恐る、練習を覗きに行くことを始めました。案の定、戦術や技術については部員からいくら説明してもらっても分かりませんし、審判をしようにもルールブック通りに進むわけではないゲームに、戸惑うばかりでした。

そんな頼りにならない顧問でしたが、部員のみなさんは折に触れて相談に来て、私が苦し紛れに何かを言えば、どんなに妙なことを言われても、内容に意を強くした様子で帰っていくのでした。どんなにばかばかしいようなアドバイスからも、有意義な何かを汲み取る力に優れていた部員たちだったと思います。

技術的な側面は、ありがたいことに、OBの方々が毎週のように練習に参加して紅白戦を戦ってくれ、ろくに練習試合も組めない顧問に代わって、実戦の機会を提供してくださいました。紅白戦の後、一言ずつながら、先輩からいただくアドバイスが、力を育む原動力になったことでしょう。ほぼ全員が社会人で、中には県外から駆けつけてくださる方もあり、部員たちも、先輩たちの意気に感じるところは多かったのではないのでしょうか。顧問に就いてから3年目に、県総体で優勝、全国総体に初出場を果たすことができたのは、そんな「オール城南」の力によるものであったと思います。

本当の最後に。
「城南を愛せよ、城南を愛せよ。君たちが城南を愛さずして、一体誰が、城南を愛する
というのか。」

旧校舎で校誌編集委員会室と化していた準備室にひっそりと掲示してあった、古いFS実行委員長のことばの冒頭です。自分が生徒だった時に目にして、その後にどんな文が続いていたのかはもう覚えていませんが、冒頭のこの部分だけは、今でも鮮明に覚えています。

さて、私は、11年間の勤務で、城南高校を愛していると言えるだけのことが十分にできたのだろうか、後に続く人の何かの参考になることを残せたらどうか。改めて思いを馳せながら、筆を置くことにします。

医療の現場で医師の頭の中をのぞいてみる（城南塾講演採録）



城南では、SSH（スーパーサイエンスハイスクール事業）の講演会（城南塾）として、各界で活躍されている方をお招きして、在校生を中心にお話をいただいています。

今年は、2月22日に、徳島赤十字病院院長の後藤哲也先生（昭和49年卒）にご講演いただきました。コロナの影響で、先生には放送室から、そして生徒たちは各教室で受講するという形になりましたが、現在のコロナ禍で、特に医療の現場、医師の診断治療というのが身近に感じられる昨今、「医療の現場で医師の頭の中をのぞいてみる」と題してお話をいただき、その概要をまとめさせていただきました。

まず、診断までのプロセスからお話ししましょう。

検査をしてほしいと思って病院へ行っても、検査をしてもらえない場合もあるし、検査をしても異常がないと言われてしまう場合もあります。実は、診断は検査だけであるのではなく、まず患者さんの基本情報——年齢、性別などを聞き、今一番困っている症状、つまり主訴を尋ねます。それからバイタルサイン——体温、血圧、脈拍数、呼吸数や酸素飽和度を調べます。あとは病歴——持病、既往歴、アレルギー歴や、家族にどんな病気の人がいるかとか、嗜好歴——喫煙や飲酒など。あるいは、場合によっては、職業歴や運動歴、女性の場合であれば妊娠出産の経験なども。また、今問題になっている新型コロナウイルス、つまりCOVID-19のような感染症の場合には、接触歴とか海外への渡航歴、ワクチン歴などが必要な場合もあります。

そういった問診がすめば、今度は身体所見に入ります。身体の状態を診ることです。視診、聴診、触診など。背中をポンポン叩いたり、膝のところを叩いて腱反射をみたり、目に光を当てて瞳孔をみたり、そういう五感を駆使して、患者さんの身体からいろんな情報を得るのが身体所見です。

患者さんからの聞き取りというのは主観情報であり、身体所見は客観情報で、その両方をつき合わせてまずあたりをつけられるような、五感を研ぎ澄ました診断能力というのが非常にだいじだと私は思っています。その上で、必要であれば血液検査やレントゲンやCTなどの画像診断といった検査をします。

診断というのは、アートとサイエンスで成り立っているというふうには私では考えています。サイエンスというのは、つまり検査——血液検査、画像検査、今では遺伝子検査などもあるし、そういった科学を駆使した診断ですが、今日はあえて、アートのほうについてお話ししたいと思います。

「医療の現場で医師の頭の中をのぞいてみる」とは、つまり、医師はどういうふうを考えて診断や治療をしているかということです。診断とは、英語ではdiagnosis。辞書には、the art or act of identifying disease for its scientific symptomsと書かれています。このアートとは、経験や学習、そして観察によって培われた技能です。芸術という意味ではないし、技術という意味とも違います。経験、学習、観察によって培われた技能だと私は思っています。医師が、それらを駆使して、患者さんからの主訴や身体が表わしている徴候などをきちんと認識し、そして疾患を正しく解釈して判断するというのが診断という行為であり、そのプロセスを臨床推論と言います。

臨床推論は、4つの段階に分かれています。1番目は、問診や身体審査による情報収集。実は、ここで、ありふれた病気があれば9割は診断がつくとも言われています。2番目は、そういった情報から問題を抽出して整理し、仮説を立てる。つまり病気の候補をいくつかあげる。それから3番目に、自分の持っている知識と照合して、どれが確からしいかを検討し、そして最後に疾患を選択する。

こうした中でまずだいじなのは、コミュニケーションです。患者さんとのコミュニケーション、つまり信頼関係を築くことが必要です。そのためには、あり方——患者さんのためになりたいという、共感をもった態度と心構え。こういう時にはどうすべきというマニュアルもありますが、それよりも優しい心が一番なんです。それから、医療スタッフとの連携もだいじです。

アートのことをお話してきましたが、やはり技術も必要です。患者さんの訴えととりとめの話から、Semantic Qualifier(SQ)という、つまり医学的に意

徳島赤十字病院院長 後藤哲也（昭和49年卒）

味のある用語に置き換えて表現するということがだいじになってきます。そのほうが、医師同士や文献やAIなどと共有しやすいのです。

そういうふうにして診断に至る方法はいくつかあります。

まずはSnap diagnosis。Snapは指をパチン鳴らすこと、つまり、簡単に一発でわかるということです。訓練された医師であれば、既往歴や身体所見、症状を見れば一発でわかるわけですが、でも、これは格好いいけれども誤診という落とし穴もあるんです。

次には、仮説演繹法というもの。これは、いろんな問題点から、鑑別診断をたくさん挙げるやり方です。腹痛といたら、どんな疾患を思い浮かべるか、入院が必要かどうか、緊急性が高いかどうか、とか。結局はありふれた胃腸炎に行きついたとしても、途中でそういった丁寧な鑑別診断をしないで、これだ、と決めつけてしまうのが「ゴミ箱診断」と呼ばれるものです。間違えおそれもあるんで、ゴミ箱診断はやめましょうといつも言っています。今は、コンピューター検索すれば、たとえば腹痛ならば、その可能性のある病名がたくさん出てきますが、医学生や研修医の時には、まず頭でいっぱい思い浮かべる練習をする。コンピューターがない時でもできるように、そして、だんだん絞っていきけるように訓練していくんですね。

それから、Pivot and Cluster strategy——これは、新しい診断方法として提唱されたもので、日本人が書いた論文にあります。最初に思い浮かべる病気をpivotとしてポンと出し、そのまわりに、よく似た病気をたくさん挙げていく。そして、患者さんの問診等で得た情報から、もう1つpivotを立てて、周囲にクラスターを作る。そうすると、その2つが交わったところが最初の1個よりも確かになり、そういったことを繰り返して絞っていくというやり方です。

最後に、Gestaltというのを挙げておきます。ゲシュタルトというのは、全体的なまとまりのことですが、ベテランの臨床医は、言葉での説明が難しいそれぞれの疾患の臨床像というのを頭の中で作り上げていくんです。部分はもちろんきちんと観察しているけれども、その情報の単なる集合でなく、全体を認識しているという感じ。患者さんの診断にたどり着く近道を知っている場合がある、と言いましょか。

その考え方に2つのやり方があって、「オッカムの剃刀」と「ヒッカムの格言」と言います。「オッカムの剃刀」というのは、14世紀の哲学者・神学者であるオッカムの一元論か



ら来ている、つまり、必要以上に多くの原因を仮定するべきでなくて、患者の症状・徴候のすべてをひとつで説明するという考えです。一方、「ヒッカムの格言」というのは、1950年代に医師が提唱したもので、患者は偶然に複数の疾患に罹患するため、複数の原因を追及すべきという考え方です。相反する考え方ですが、その両方を使わなければなりません。

昔、まだいろいろな病気がわかっていなかった頃は、1つの原因でいろいろな症候を説明できるというわけで、「なんとか症候群」のような病気が発見されました。一見無関係な症状とか検査値異常なども、1つの原因から生じるのではないかと。そのように、一元論で解釈できないかと、まず一生懸命考えることがだいじです。けれども、今は高齢の患者さんも増えて、複数の問題を抱えておられる方が多いので、全部を1つで済ませるのは非常に無理があります。だから、一元論で一生懸命に考えた上で、やはり「ヒッカムの格言」、つまりいろいろな複数の想定もするということが必要になってきます。

では、このように問題の解決力をつけるにはどうするか——これは、医学の診断だけでなく、一般的にも通用することです。つまり、知識というのは、できるだけ効率よく収集し、取捨選択し、常に更新し続けることが非常に重要です。最近ではネットで手軽に収集もできますが、玉石混交ですので、正しいものと間違っただけのものをきちんと取捨選択できなければいけないし、昨日正しかったことが今日はもう正しくないということもよくあります。特に医学の世界においては、常識がどんどん変わっていきます。たとえば、昔は、卵を2個食べたなら動脈硬化になるとか言われましたが、今は、食事によるコレステロールはほとんど関係ないとされています。常識がひっくり返ることはいくらでもあ

るので、常に更新し続けることが大切です。そして、医学の場においては、「ゴミ箱の診断」——つまり、お腹が痛かったら胃腸炎、喉が痛かったら風邪というような安易な診断が上位にあるといけません。

それから、技術を身につけるには、正しいやり方で数をこなすことが大切です。手術がうまくなるのも、器用さではなくて、正しいやり方で数をこなしてこそ手術の達人になるのです。

そして、技術よりもっとだじじなのが感受性、想像力というのが非常に大切です。共感できる優しい心を持っていれば、想像力が上がるし、対話を厭わない姿勢ができます。そういったことは、一般社会においても非常に重要なことだと思います。医学においては、大切なサインを感じ取れるようになるのです。Red flag sign と言いますが、あの患者さんは危険な状態だと見ただけで感じ取れるような、そういった感受性が育われます。

そして、経験も非常に重要ですが、やはり根拠となるもの、つまり知識や論文などできちんと科学的な事実をもとにして判断しなければなりません。そこに、経験を繰り返し、振り返りながら検証して整理していけば非常に大きな力になることは間違いないでしょう。

それでは最後に、おうちに持って帰っていただく、つまり take home message、心にとどめておいてほしいことを挙げておきます。

繰り返しになりますが、まず、あり方。心構えと態度はマニュアルよりも重要です。たとえば、医学の現場だけでなくファーストフード店の店員さんにも、マニュアルはありますが、「あり方」がしっかりしている店員さんならば、さらにお客から喜ばれることでしょう。

それから重要なのは、周囲の人たちに敬意をもって接すること。臨床の現場というのはチームでやっていますが、これはいろいろな組織、会社とか学校でもそうですね。チームでやることによって大きなことが成し遂げられます。わからないことを尋ねる勇気を持ち、アドバイスを虚心に受け入れること。ただし、うのみにせず、必ず自分で検証することが非常に大切です。

そして、さっきも出しましたが、知識を効率よく収集、取捨選択し、常に更新すること。技術は、器用さではなくて、正しいメソッドに基づいて数をこなすことによってのみ身につくということ。経験したことを常に振り返って、

次の目標設定につなげることによって成長できるということ。

そういうことを、医学の診断という部分、アートの部分を中心にお話をいたしました。

最後に、今、皆さんに大きな影響を及ぼしている COVID19、つまり新型コロナウイルス感染症について。最初は、風邪のちょっとひどいやつくらいで、あまり恐れずに自由に生活をすればいいのではないかという意見もありましたが、論文からは、インフルエンザと比べて死亡リスクが 3.5 倍ということもわかり、決して侮ってはいけない病気です。しかも若い人もかかるし、大切な家族や高齢の方に対しても危険性が高い病気であることは覚えておいていただきたい。

それでは、これからどうするのかということですが、出口戦略として非常に重要なのはワクチンです。今、名前が挙がっているファイザー製のワクチンは、効果、安全性ともに優れているというデータが出ています。みんなが不安がっているのは、メッセンジャー RNA という、これまでになかったタイプのワクチンだからということですが、これは遺伝子の情報を書いた核酸につながったもので、毒は全然ないです。ウイルスを弱毒化したり不活化したりする今までのワクチンとは違います。また注射しても体内にずっと残るというものでもなく、今言われている副作用というのはおそらく、安定させるために含まれているポリエチレングリコールとか、そういった添加物へのアレルギーだと思いますので、基本的には恐れる必要はありません。

それから、発症を止める効果は非常に高いです。95%以上あると言われている。感染を止められるかどうかはまだきちんとしたデータが出てないですが、でも、感染しても発症しない、重症化しないということであれば、将来的に元の生活に戻ることが可能になるということで、いいニュースだと思います。

ワクチンを目の敵にする人もいますが、偏った考え方にとらわれずに、公平な目で見て、ご自分の体質とか、医師に相談するとかを経て、可能であればワクチンをするのがいいと我々は思っています。

徳島県でも、まずコロナに関わっている医療従事者から接種が始まりますから、私も受けようと思っています。何かあれば必ず報告しますので、皆さんも、我々医療者がワクチンを受けるのを見たうえで冷静な判断をしていただきたいと思います。

東京海洋大学 練習船 “海鷹丸”

船長（教授） 林敏史（昭和 55 年卒）

東京海洋大学って？

大学は東京都港区（最寄り駅は品川駅）と江東区（最寄り駅は越中島駅）に所在しています。「東京都港区といえば、赤坂・青山・六本木・・・、江東区といえばフジテレビのお台場・ビックサイト・キッザニア東京」と歌の文句に出そうなロケーションの外れにキャンパスがあります。旧国立大学の中では小規模ですが、とても単価の高い土地にあり、100 円ショップや一般的なスーパーマーケットなどの生活感はありませんが、各国大使館や芸能人が多く住む街であり、構内から東京タワーをみることができる都心の大学です。

東京だけでも国公立大学がたくさんありますが、2003 年に東京商船大学と東京水産大学が合併して誕生してきた古く新しい大学です。一学年 350 名で高校より小さい規模ですが、全国数か所に実験場や大型練習船を 4 隻所有しており、財産規模は全国国立大学の中で第 24-26 位です。

わずか 3 つの学部ですが、それぞれ食品や水産、生物（魚類）や海洋資源、船舶と運用、海洋の環境や海に関する政策関連の専門的な教育・研究を行っており、海洋基本法の改定に伴い新たな学部が増設され、水産や海運だけでなく、海底資源や地球環境、海洋全般に関する専門性を活かした大学となっています。

* 世界第 6 位の広大な経済水域を持つ日本は、2007 年に成立した海洋基本法と安倍総理大臣の第 3 期海洋基本計画を基本とした「水産・海運・海洋資源・海底資源（ｽﾌｧｲﾄﾞ・ﾘｽﾙ）」における海洋産業の活性化にそった海洋に関する教育・研究の重点化政策を実施しています。

海の大切さ

大航海時代から「海を制する者は世界を制する」の格言のまま、英国からアメリカそして中国など、巨大資本を投じた海洋開発や両隣の国との経済水域拡大への争いとなり、北極航路の占有権競争など、地球上では海洋上の争いは激化しています。また温暖化による台風の大規模化や天候不順による災害が拡大

していることも心配です。またプラスチックごみ由来のマイクロプラスチックでの生物濃縮からの人体への影響や工業化による海洋汚染など海洋を取り巻く環境問題の解決も見通しがついていません。現状では原因を探っているところですが、解決に向けては、地球規模で活躍する皆さんの世代に期待しています。

東京海洋大学の二つの歴史

1867 年江戸時代末期と 1878 年明治政府でのパリ万博に日本が参加した時、缶詰など水産物から外貨取得への確信があったものの、水産への「殖産興業」は少し遅れて明治 20 年代にやっと教育機関の整備と漁業振興が始まり、日本沿岸で乱獲する外国漁船に困りながら、1888 年に水産講習所（日本水産会：1882 年設立）ができたのが、東京水産大学（水産庁から文部省）のはじまりです。

一方、東京商船大学は、坂本龍馬の亀山社中（海援隊）に共にしたといわれる岩崎弥太郎が三菱商会や日本郵船を起業し三菱財閥（創始者）となってきましたが、外国からの貨物や商船客の争奪戦から脱却するため国が買い上げた船舶の運航を任せられ、国の要請で 1875 年三菱商船学校を作ったのが東京商船大学（官立から文部省）のはじまりです。

富国強兵の影響で、国内外の多くの会社が乱立し、外国資本との競争も乗り越え、奇跡的に海洋分野に残った組織の一つが、東京商船大学と東京水産大学だったのかもしれませんが。卒業総数も少ない学校ですが、それぞれの業界を過ごし、総理大臣 1 名、大臣 3 名を輩出しています。作詞家の星野哲郎や俳優の柳生博も卒業生です。2003 年に東京海洋大学、翌 2004 年に国立大学法人となっています。個々の大学の生存競争が厳しくなる中、本学は海洋水産の資源や海洋での環境問題などのほか、南極調査や深海調査に参加やさまざまな客員教授を迎えるなど大学を知ってもらうための広報活動にも力を入れています。



岩崎弥太郎



さかなクン

憂鬱だった高校時代

他界した祖父・父は旧徳中、男ばかりの3人兄弟も城南高校でお世話になりました。

入学前から吹奏楽部の定期演奏会の練習に参加しました。入学後高校として初めて参加するコンクールではトロンボーンからスーザフォンに切り替えて参加しましたが、肩にめり込んで痛いため無理言って四国大会（昭和52年）では富田中学校からチューバを借りてもらいました。1年生の時の自由曲はショスタコーヴィッチ作曲の“祝典序曲”、2年生の時は“シンフォニア・ノビリッシマ”だったでしょうか、正規部員でなかったため3年次は出ていません。吹奏楽は卒業後も城南高校OB吹奏楽団としてチューバで参加し、和田先輩が指揮をしたワーグナーの“エルザの大聖堂への行列”で四国大会まで参加しました。

柔道部は1年生の秋から入部しました。小学校の頃から始めた柔道は、中学にはいるまでは賞をもらっていたのですが、高校では一勝もできませんでした。綺麗な技があればよいと思っていましたが、スピードとパワーや関節技や締め技にはとても追いつきませんでした。大学でも柔道をやってわかったのですが、70kgの人を投げるのであれば、ベンチプレスで重さ70kgのウエートを持ち上げられないと、しっかり組み合った相手を動かすことはできません。私は、辛い練習をさばっていました。「英語の会話と文法の関係みたい」というと英語の先生に怒られますが、スピードを主とするとパワーが不足となり、パワーに頼ると力業となって俊敏さがなくなります。どちらも相手以上のものが必要であり、努力と練習しなかったことにやっとなりが付きました。技が掛かるようになるのに3年かかりましたが、瞬発力を高める筋トレを考え、一つの壁を越えるのにはそれなりに時間が掛かるものだ実感しました。大学3年次に東京都国公立体育大会で3位になり、私立大学が入っていないとはいえ、柔道で賞状がもらえるとは思っていませんでした。今は顧問であることも関係し、週に1回ほど練習にでています。50歳の時に先輩からの指導もあって現在三段をいただきました。

高校時代から試験勉強も焦って簡単に点を取ることばかりに気を取られ、基礎のきちんとした勉強を怠っていました。入学後最初の頃は授業も分かりやすく、クラスのみんなと楽しい高校生活を送れると思っていましたが、気が付けば授業はわからなくなり、みんなについていけず、中ぐらいだった成績もガタガタ（最低は高校2年生の時500番台でした）と坂を転げ落ちるように下がって目の前が真っ暗となり、学校に行くのも辛くなっていました。

当時のテレビで「大草原の小さな家」というアメリカ開拓時代の家族ドラマが流行っており、それを見ていた同級生から、「南米（パラグアイ）に行かないか？」といわれたときは驚きましたが、理想的な家族については同じ思いだったので、少し救われるような気持ちになりました。そして彼曰く、農業系の大学（専門家）を卒業すれば、数ヘクタールの土地と農業機械を貸してくれることで、ドラマのままのインガルス一家と同じく開拓移民である自分の将来を描いているようでした。どうせなら仲間と一緒にと募集していましたが、どうやら意中の彼女を口説くこともできず募集は断念したようでした。彼は東京の拓殖大学に進学したのですが、理由不明のまま自殺してしまいました。友人と葬儀にいき、形見分けとして木材をキャンバスにした油絵をもらいました。彼は登山部で全国準優勝するなど体育活動の実績の他、徳島のギャラリーで個展を開くなど美術にも優れ、城南祭でのクラスの大旗は彼のデザインでした。いまでも絵は大事に持っています。

一方、徳島代表の池田高校が春夏と甲子園で大活躍し、気が散って集中できなくなり、テレビを見なければよいのですが、NHKの朝の連続テレビ小説「おしん」も後ろ髪惹かれる魅力的なドラマでつつい見てしまいました。おかげで一時間目の物理の授業はいつも遅刻となり、苦手な科目になってしまいました。また学習院大学に進んだ悪友（老舗の若旦那かな？）は、当時評判だった映画「スターウォーズ」のチケットがあるから行こうといわれ、はじめて授業を抜け出して映画館に行っていました。なんで私を誘ってくれたのだろうと今になって不思議です。まじめだけが取り柄だった自分がますます自分を追い込むことになり、青春で楽しいはずの高校生活は煮え切らない長くて重い時間を過ごした記憶になっています。

高校卒業して4年間の充実した徳島での生活

卒業して夜学の徳島大学工業短期大学部応用科学科に進学し、昼間は安宅町の住友内科病院に就職しました。病院では人工透析とレントゲンの助手をやっていました。院長先生も薬剤師の奥様も城南高校のご出身で、就職したころは「進学しないのか」といわれました。短大を卒業する頃、工学部へ編入する機会がありましたが、もう一步とどかず、院長から引き続き務められるお誘いも頂いたのですが、やりがいのある病院も辞め、就職もしないまま、もう一度、大学を目指すことにしました。

家に閉じこもり高校時代の教科書を開きなまし、数学でわからないところは、3年次の担任だった数学の宮田先生に直接、城南高校の職員室で伺いました。今から考えると無理なことばかり相談し、ご迷惑だったと思いますが、大変お世話になりました。

脱・徳島と2回目の就職

長男だったこともあり、公の理由で徳島を出るためには大学進学しかないと

思い込んでいました。病院での就職した3年間の貯金を親に渡し、足るわけでもないのですが、これで学費にしていよいよと嘆願して、必死で試験勉強しました。しかし、またはも共通一次にうまくいかず、二次試験で逆転できる理系の大学を探し、やっとの思いで昭和59年東京水産大学に合格しました。徳島新聞の合格欄に名前が掲載され、数学で元担任の宮田先生や知人が大変喜んでくれて、じわじわと嬉しくなってきたことを覚えています。

化学の河野？先生は、いつも授業の合間に、「ちょっとでも良い大学、ちょっとでも良い企業に入らないといけないよ！世の中これだから」といってチョークを持っていない手の人差し指と親指を丸くしてお話してくれたことや「大学は総合レジャーランド」の言葉を思い出し、周りから「漁師になるの？」といわれたりしましたが、自分では十分な成果として上京することを決意しました。

東京の中央線沿いに徳島県人寮があったのですが丁度、閉鎖となっていました。大学に入る数年前、同級生を頼って東京に遊びに行ったときに中に入ったこともあり期待していましたが、不安なまま大学寮に入寮しました。

徳島県出身者は誰もいない学生寮に入り、先輩からの厳しい指導での飲み会が多く、飲んだくれの日々でしたが、授業は集中して聞くよう心掛けました。産業心理学の授業では、城南高校出身（京都大学卒）の先生だったこともあり、高校近くの駄菓子屋の話を懐かしんでいたことも安心した気分となりました。大学生になれたものの“レジャーランド”には程遠く、お金のない貧乏学生にとっては何もないに等しい環境でした。実家を出て学生生活では洗濯機の使い方も分からず、冷蔵庫を過信して買った食べ物を無駄にしたり、親のありがたさが身に染みしました。

当時、外国旅行はまだ珍しいことでしたが、大学の乗船実習では国費で海外に行くことができるため、乗船実習のコースを選択し、その勢いで同大学の専攻科（漁船運用学コース）に進みました。12ヶ月の乗船を修了し、研究室の教授の推薦もあり、大学練習船の航海士になることができました。

昭和の終わりから平成元年にかけて当時世の中はバブル景気で、東京竹芝のデイスコは異常に賑わうなど民間企業実績や就職が大変良く、公務員への就職希望が減少し比較的入りやすかったかもしれません。銀座のクラブでアルバイトする女子大生の中には毎月50万円近く稼いだツワモノもいたようですが、それもすべてバブルとなって消えてしまったことでしょう。

楽しい寄港地

いままでに寄港した外国は、アジア、欧州、アメリカ南北、アフリカなど40か国の港になりました。いろいろな宗教（習慣）や言語に戸惑いながら、今でも手振り・身振りで何とか意思を伝達して、食事や観光を楽しんでいます。

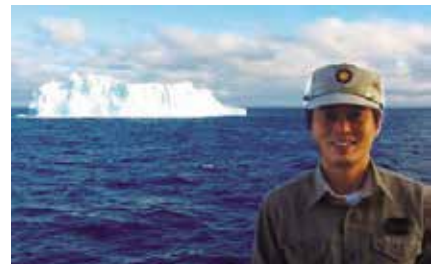
嵐の岬といわれたアフリカの喜望峰を越え、ケープタウンでの発砲事件に遭遇したり、レートを考えずに購入したタンザナイトでの失敗、シンガポールやアジアの寄港地での本物か偽物かわからないお土産類、モーリシャス（ボートルイス）の綺麗なビーチでの海水浴、マダガスカル（トアマシナ）では飲料水にあたって皆でおなかを下したり、南米（バルパライソ・モンテビデオ・レシフェ・パナマ）での赤ワインのおいしさに感動したり、焼け跡の家にマシガンをついたトーチカが各街角にあったインド（昔のボンベイ）やパキスタン（カラチ）での宗教騒動に驚いたり、タイ（バンコク）やフィジー（スバ）でのクーデターが起こって治安が悪化するなど、大変な思いや実際に危険なときもありましたが、いまは良い思い出となっています。

ニュージーランドからタヒチそして終焉の地ハワイ島と南太平洋の父といわれる英国のキャプテン・ジェームス・クックが周航した当時の航跡をたどり、金星日食の世界同時観測によって地球の大きさを計測したという場所を散策しながら近くのバーでビールを飲むのも一興でした。

個人的にはオーストラリアのバースやメルボルンがお気に入りです。イタリア系やギリシア系の街があったりしますが、どこのレストランもおいしくいただけます。オーストラリアは一人一皿で、おかわしをシェアしないマナーがあります。ただでさえ食べきれないほど出てくるのですが、最初に断っておけば、お店の人に嫌な思いをさせなくて済みますので、気を付けています。また虹の旗のあるお店は、ゲイの人たちが入るお店なので間違えないようにした方が良く体験上申し上げておきます。

練習船での漁業実習

練習船では海洋観測の他漁業実習があります。夏は東シナ海でトロール操業、日本海でイカ釣り実習、冬は赤道付近でマグロ延縄実習を行います。それぞれ水産庁へ許可申請を行い、特に東シナ海では中国や韓国・台湾と経済水域を接しており、領海とは異なる漁業調整水域を設けて各国で操業しています。現在、沖縄から中国大陸にかけてガス油田が整備され、中国にとって尖閣諸島はこの海底資源にとって大変重要な島となっており、中国領土となれば、経済水域を





大幅に広げるだけでなく、ガス油田開発に有利となります。

中学・高校生当時、日本は水産大国ペルーを抑え漁業生産量が世界一になり、中国や韓国の沿岸のみならず世界中の海から魚を獲っていましたが、200 海里的の領海が主流となると、日本の漁船は各国から締め出され、漁業生産量は横ばいとなっています。一方、魚は世界中で食されるようになり、特に中国やインドネシアは国内養殖魚も含め、記録的な漁業生産量をあげ世界トップの漁業生産国になっています。

水産物は、海洋たんばく源として貧困の国々に輸出されているほか、イエスキリストが魚を食せよといった頃は異なり、魚食文化が広がっており、水産漁業は世界各国の文化になって拡大しています。国連の FAO では、水産資源の枯渇に警告をならし、資源維持型の漁業生産を目指しています。魚種別の資源量を算出し、適切な漁獲量を定めることをマグロやカツオなど主要魚種から始まっています。マグロにおいては、世界 5 か所でのマグロ委員会で登録され、人工



衛星で監視された漁船のみが、水揚げできる仕組みをつくっています。不法な操業漁船を無くすための運動を行っています。

また産地証明や食品製品の品質について、HACCAP など国際証明を提示する方法が現在行われています。これが無いと輸出

出ができないようになっていきます。

小学生の頃、給食の時間で真っ黒い肉の塊の“クジラの竜田揚げ”がみんなの好物だったと思いますが、現在は国際捕鯨委員会 (IWC) で商業捕鯨が禁止され、多くは流通していませんが、どこの国 (ノルウェー・アイスランドを除く) に行っても鯨を食べる日本の習慣は理解をもらえない状態です。当時日本では貴重で高価な牛肉や豚肉を食べることは難しかったのですが、現代の子供たちはステーキなハンバーグでの牛肉のほうが好きで鯨には見向きもしないことでしょう。

*1974 年頃まで捕鯨国はオランダ・英国・米国・ノルウェー・日本です。

子供の頃、肉屋さんの店先で、揚げたてのコロッケを口にしましたが、最も安い鯨のフライは常温に冷えると真っ白な油で幕ができかつ匂いがしたとのことで、いやがって食べなかったと母親に言われたことを思い出しました。

漁船漁業において、漁作業は過酷で大変危険が伴います。大型の油圧機器を使用し、長さ 100m 程度の大きな網を約 2 ノットの速さで海底を曳航し、漁獲された場合は最大 15 トンまでの重さの網を海底から引き揚げ、様々な漁業機器を切替えての作業となっています。

これらの作業経験が、現在の複雑な海洋観測機器の取扱手順の基礎になっています。

南極調査航海

昭和 31 年 (1956 年) 南極観測船“宗谷”と東京海洋大学練習船“海鷹丸”が世界気象観測年の日本代表調査隊として日本の南極観測が始まりますが、この時には洋上での観測技術を改良し、極寒の海上でも深海での採水やネット観測による生物採集が行われました。

現在まで東京海洋大学では 20 回を超える南極洋観測に従事しています。学生らの実習訓練に織り込みながら、極地観測をおこなっています。

南極は魅力的な海域ですが、お土産屋さんもなく、極域は低気圧が集まってくるため、天候がすぐに変わる危険な海域です。何度か南極域に入りましたが、毎回、晴れたり曇ったり時化ったり吹雪だったり、同じ気象や海況はありませんでした。

それでも晴れ間に見える太陽 (夏季は太陽が沈みません。白夜といわれており、一日中明るくて昼なのか夜なのかわかりません) や、少し緯度的に北上すると暗闇にうかぶオーロラが神秘的な光の帯で空を泳いでいます。これが朝方



になると暗い緑色だけだった光の帯に赤色加わり、日の出前の短い時間です。ありがたい気持ちになれる瞬間です。

一日中明るい、眠くなくて体の調子が狂ってきますが、食事が重要な体内時計となっているようです。

クジラ類やペンギンも多く、あちこちで潮を噴き上げ、氷山の上で黒い塊に見えるペンギン達がびよびよん飛んで、一斉に海に飛び込むのも爽快です。

夏の南極は、氷点下になることは珍しく、海水温も 2-3 度あります。エアロゾルという、空気中の小さいごみがほとんどないため、湯気が見えません。熱いコーヒーも湯気が無く、暑さが見えません。ということで寒さも見えず、実際よりも寒さを感じなくなります。

昔は、水が貴重なため、南極調査中はシャワーも禁止でしたが、現在は海水から真水を作ることができ、無駄使いはできませんが、シャワーを浴びることができます。

南極の氷は、南極大陸に降り積もった雪が約 1000m の高さになると、自重で大陸を滑り出し海に入ります。海に入ったところから浮力が働き、途中でボキッと折れて、それが氷山のたまごとなるようです。この行程には 3 万年かかると専門家から聞いたことがあります。

今は異なり昔我々は観測の合間に、氷山のかげらを拾って、お土産にしています。

スコッチウイスキーなどに氷をいれると、パチパチと音がして、氷の中から気泡が出てきます。それを飲みながら 3 万年の地球の暦を瞑想していました。現在では氷採取はできなくなっています。

最初は冒険的な航海でしたが、現在では観測手段が確立し、新たなセンサーを係留し、長期にわたってデータを取ることが多くなっています。世界の海流



は南極の冷たい海水が落ち込んで始まっているとも言われており、まだまだ未知への興味は尽きないようです。

船は南極洋に入るために、暴風圏を通過しなくてはなりません。数日は大揺れを我慢しなければいけません。揺れが大きくなると、ご飯やフライが作れなくなり、食事ができないときもあります。揺れているときはコップを持ったままで、飲み物をついでもらいただきます。酒を飲んでいるときは引き際が大変です。

今より小さい旧海鷹丸は、暴風圏 (35 度以上傾斜した) を越えると、壁に足跡が残っていたそうです。現在は揺れ留の装置を船体につけており、揺れは 4 割減となっています。

超深海調査での研究者の一言

極地での調査は気候変動の把握にも重要とのことですが、宇宙と同じく、超深海は地球上最後のフロンティアとも言われ生物や鉱物資源の研究が進んでいます。2016 年本学のプロジェクトに NHK の Deep Ocean のスタッフが乗船し、世界 5 か国の深海を専門としている研究者とともに、地球で最も深い水深 10920m の海：ミクロネシア海域のマリアナ海溝チャレンジャー海域で様々な調査を行い深海から魚類採取に成功しました。1958 年アメリカのパチスカーフの日本海溝調査に支援船として本学練習船が参加してから約 60 年後のことになります。この調査の記録はテレビでも放送されましたが、国立博物館での深海展で展示され多くの皆さんに見ていただきました。

この調査に船長として参加し、海況での調査実施の判断を行いました。イギリスやアメリカそしてデンマークから持ってきた最大 2 トンの調査機器の内、いくつかは作動できず困りましたが、何度も試練を越えてきた研究者たちは、機器を自分で修理したり作り直したり、とその器用さに驚きました。何十回、何百回失敗を繰り返して作り出した何物にも代えられない大切な機器とのことでした。最も印象に残ったのは、主要な精密機器は高価な機器ですが他は手作りだったことです。「誰もやったことが無いことをやるのだから、装置は自分で作る」とのことでした。

現在の医療や科学は、最新の高価な機器がないと何もできないという研究者が多い中、誰もやったことのないものは、今あるもので最善を尽くすという姿勢に感動しました。良い環境は自分で作っていくとのことでした。なかなかできないことだと思いますが、最先端の研究者の心得に触れたような感覚になり、若い研究者や学生達にも十分チャンスがあるのではと、日本の将来にホッとしたところでした。



最後に

私は船酔いがひどく、まさか船に乗るとは思っていませんでした。平凡に暮らせればと思っていたのに不思議です。やりたいことがたくさんあって迷っているうちに、歳を重ね今年還暦になります。人生ではまだ若い方かもしれませんが、時間はあっという間に過ぎ、時間の経過は年を取る毎に早くなっているように感じています。

今年末 60 歳になるときに、このような機会をいただきありがとうございます。大学の広報や船での体験、高校時代の想いを勝手に書かせていただきました。多くの失礼があることをお許しください。

今は健康が一番と思い、無理はしないようにしようと思っています。

コロナ禍で大変な時代ですが、皆様どうぞご自愛ください。

東京豊海水産ふ頭 海鷹丸船長室にて

絵本「とくしまからきました」から絵本「Yusanbako」へ

山崎純世（旧姓三谷）（昭和 53 年卒）



城南高校卒業生の皆さん、はじめまして。

私はペンネーム・やまさきじゅんよで、創作絵本作家活動をさせて頂いています。

数学と化学が大好きで国語が苦手だった私は、徳島大学薬学部を卒業し

て薬剤師になりました。そんな私が、30 歳半ばで徳島児童文学会に誘われて童話を書き始めました。子ども 2 人が医学部生になった時、大阪文学学校の通信教育を勧められ 50 歳で受講しました。その文芸誌「樹林」の表紙絵に応募したら、私の絵が採用され、担任の日野範之先生より「故郷徳島のことを書いて、自分で絵も描いて絵本を作りなさい」と指導されたのが、絵本創作との出会いです。

まずは、阿波弁「いける」の素晴らしさを伝えたいと思い、当時、日和佐に住んでいた梅田俊作先生、佳子先生の指導を受けながら、親子で「いけるいける」と言いながらカレーを作る絵本「いける」を創作しました。これが NPO 法人エクスプレス絵本コンテストで岩崎書店賞を受賞しました。徳島県立図書館様が絵本「いける」の原画展を開催して下さい、飯泉嘉門徳島県知事様にご観覧して下さいことは貴重な思い出となっています。

次に、ナマズをもらったので、吉野川の北岸から見た眉山の風景を取り入れた絵本「くもをだいたナマズ」を創作し、おおしま国際手づくり絵本コンテストに入選しました。

私が子どもの頃、異臭がしていた真っ黒い新町川が、多くのの人々の努力により透き通る川へと変化したことを知り、絵本「川をみにきてよ！」でその変遷を描き、東京展「絵本の部屋」にてマーベラス賞を受賞しました。

絵本創作を始めて 5 年目に、ようやく徳島 100% 満載の絵本「とくしまからきました」ができました。図書館で絵画展を開催し、創作話の講演会も行なったら、「この絵本こそ、子ども達に読み聞かせをしたい」と言う声を頂き、描き直して 2017 年に出版しました。阿波弁を喋る男の子と一緒に質問の答えを考える構成で、面白い絵本と好評を得ています。徳島のお土産にも使われています。徳島のことがよくわかると、アマゾンで 5 つ星をもらいました。ぜひ、読んでみて下さい。そして、徳島のことを聞かれたら「何

もない」とは言わずに良いところをお話し下さい。

絵本「とくしまからきました」に描いた遊山箱を見て、「今の子ども達は知らないから、遊山箱だけの絵本を作って欲しい」と言われましたので、色々調べて、絵本「遊山箱もって」を 2019 年に出版しました。

遊山箱は徳島の伝統工芸品のお弁当箱です。初めは家族用の大きな遊山箱で江戸時代 1757 年の物が現存しています。大正時代になると一人用の小さな遊山箱が登場し、旧暦の節句 4 月 3 日には、巻き寿司や寒天やういろなどを詰めて、遊山へ行くのを楽しみにしていました。しかし、昭和 40 年プラスチックの普及により廃れてしまいました。現在、職人さんが再び作っていますが、遊山箱を知っている方は少なくなりました。

私は、絵本に、古い時代の遊山箱や取っ手や絵柄も描き残し、使われ方もお話の中に描きました。思い出がある現在 70 歳から 80 歳の方々より、「この絵本を読むと、遊山箱を持って遊山へ行ったことを思い出し涙がでてる」の言葉をもらい感激しました。

遊山箱の絵本のおかげで、大塚ホールディング株式会社様が発行している「大塚薬報」に私の絵本や遊山箱が紹介されました。

遊山箱を外国の方にも知って欲しい。また、小学校で英語の勉強が始まったので英会話の勉強をしながら、遊山箱を知って欲しいと英語版絵本「Yusanbako」を 2020 年秋に出版しました。英訳の編集を、人形浄瑠璃をするために徳島に住んでいる翻訳家のマーティン・ホルマン氏が担当して下さいご縁で、阿波十郎兵衛屋敷にて、英語と日本語による読み聞かせ出版記念イベントを開催させて頂きました。沢山の方々に来て下さり、感謝につきます。

「遊山箱もって」「Yusanbako」の絵本は、遊山箱の事がよくわかると、遊山箱と一緒にプレゼントされており嬉しい限りです。

子ども達に遊山箱を未来へ伝えてもらうために、絵本の読み聞かせ & 遊山箱の歴史を語る催しの活動もしています。

どうぞ、絵本を読んで、遊山箱はじめ、徳島の魅力を再発見して下さい。これからも、徳島の魅力を伝える絵本を創作していきますのでよろしくお願い致します。



城南高校での苦難と立ち直りと瀬戸内村上水軍の研究

瑞宝重光章受賞おめでとうございます。西村あさひ法律事務所弁護士 園尾隆司 (昭和 43 年卒)



私は、昭和 40 年に城南高校に入学しました。入学当時は、京都大学理学部を志望する理系少年でした。その私が、昭和 49 年に裁判官に任官して、その後 40 年間の裁判官人生を送ることとなった経緯についてお話します。

私は、中学生のころから湯川秀樹・朝永振一郎両博士に憧れ、城南高校入学当時は、京都大学理学部に進学することしか考えていませんでした。しかし、高校 2 年の終わりころ、入学時以来のクラスメイトで、熱い想いを抱いてきた初恋の相手から、突然に絶縁を宣告され、人生が暗転し、何もかも捨てたくなって、急遽文系クラスを志望して文系の道を歩むことになりました。高 3 になっても人生の目標は定まらず、勢い、志望学部も定まりませんでした。ここで救いの手を差し伸べてくれたのが同じクラスの親友でした。彼は傷心の日々を送る私に、大学入学から専門学部決定まで 2 年間の余裕のある東京大学文科第 1 類の受験を勧めてくれ、自らも京都大学文学部の志望を断念して、私に付き合ってくださいました。若いうちは無謀なことをするものですが、どういうわけか、2 人とも合格してしまいました。しかし、人生の目標が定まらないことになりはたなく、大学在学中に試みに受けた司法試験に奇跡的に合格したことから、それなら弁護士になってみようかと考えたのです。

裁判官や弁護士になるには、司法試験合格後 2 年間司法修習を受ける必要があります (現在は 1 年間)、修習地が水戸と決まりました。その修習の一環として配属された法律事務所で、人生の師と仰ぐにふさわしい尊敬すべき弁護士に会い、夢中で修習に励んだところ、終了間際になって、是非にとその事務所の弁護士になるようお誘いを受けました。有り難いお話でしたが、徳島出身の私が水戸で弁護士をするのに違和感があり、さりとて尊敬する先生のお誘いをむげにお断りするのは気が引けて、思い余って、「先生、実は、私はまだ若いので、裁判官をやってみようと思うのです」と言い訳をしてお断りを断りました。

いざ、その言い訳が諒解されてみると、尊敬する弁護士を騙したこととなるのが気になり、かくなる上は数年間だけ裁判官になってみようと考えて、修習終了とともに裁判官に任官しました。当時は、若ければ裁判官になれる時代だったのです。そうし

て任官した後、光陰は矢のように流れ、定年まで 40 年間裁判官を務める結果となり、退官後に弁護士登録をして 6 年となります。裁判官を 40 年やった以上、弁護士も 40 年やろうと考えています。

その私が、先ごろ、伊予の地に 1000 年の命脈を保つ村上水軍の末裔の方々に会い、『村上水軍 その真実の歴史と経営哲学』と題する書籍 (写真参照) を出版しました。徳島新聞 (2021 年 1 月 20 日付け) で、その経緯をお読みになった方もいらっしゃるかと思います。元裁判官がなぜ村上水軍の歴史と経営哲学の研究を、というのが多くの方から寄せられた疑問でした。告白すると、私は生来、出会って感銘を受けた方に打ち込む性格なのです。

私が村上水軍の末裔の方々と出会ったのは、弁護士に転身して、ある国際海運会社の民事再生事件の代理人を務めたことからでした。この会社は、再建途上でスポンサー探しに行き詰まり、自力再建か破産かの瀬戸際に立たされました。そのときに援助の手を差し伸べてくれたのが村上水軍の末裔の方々でした。調査を遂げた結果、村上水軍は、1000 年前に瀬戸内で海運業を始め、今や世界に名だたる今治海事産業群 (クラスター) を形成して海運業を営んでいることがわかりました。その経営哲学は、「牽制と連携」「常に浮き沈みに備えよ」「自らの依って立つ地を活力の源とせよ」でした。

1000 年の間、郷里に根を下ろし、浮き沈みと苦難に耐え、今も郷里を支えている姿に、同じ四国に育つ者として、心を洗われる思いがしました。村上水軍の歴史については、面白さ優先で描写する流行小説の影響を受けて、「祖先は海賊」などという俗説が広まっています。これに疑問を感じ、裁判官生活 40 年間で培ってきた事実認定の手法を使って、このたびその水軍の真実の歴史と経営哲学を解き明かそうとしたのです。村上水軍研究に没頭する中で、自らの依って立つ地を活力の源としている村上水軍の末裔の方々に共鳴し、徳島に育ち、徳島の心を保ってきた自らの心の高鳴りを感じました。

恋愛も失恋も、そこでの苦しみも、親友の援助を受けての立ち直りも、みんな徳島城南高校で得たものでした。今後も、自らの依って立つ地を活力の源としたいと思っています。



同窓会本部事務局よりのお知らせ

本年 5 月 22 日 (土) に、オンラインにて同窓会役員会が開催され、7 名出席のもと、令和 2 年度の決算および事業報告 (2020 年同窓会名簿の発行 (5 年毎) を含む) が承認され、令和 3 年度の予算および事業計画が提案、検討されました。

その結果、新型コロナウイルスの影響で、本年の理事会・総会は中止といたします。予算および事業計画については、学年幹事の方に資料をご送付しての書面議決の形を取らせていただきます。

コロナ禍でなかなか皆さんとお会いできないこともあり、これからは、ホームページ等を通じて活動報告や交流を進めていけますよう検討、工夫を重ねてまいります。

編集後記 ★今回からカラーになり紙面からあふれ出しそうな充実した内容になりました。ご寄稿いただきました皆さまに御礼申し上げます (あ)
★編集を終わってみると 43,738 文字、1 ページあたり 2,733 文字、文字サイズと行間を小さくすることで 16 ページに収めることが出来ました。読みにくいかも知れませんが、内容はとても素晴らしいものばかりです。タイトルの城南高校写真は、記憶を頼りに当時のカラーを再現してみました。(道)
★今年は同窓会開催の報告がなく寂しい紙面になるのではと心配でしたが、皆様から力作を沢山ご寄稿いただきました。川竹副会長には編集に大変なご苦勞をおかけしましたが、おかげさまで無事に出来上がりました。本当に読み応えのあるものばかりなので、ぜひ御味読ください (た)

おめでとうございます

令和 2 年 秋の叙勲 受章者

- ◆ 瑞宝重光章 岡久 幸治 (71) (昭和 43 年卒) 元東京高裁判事・部総括＝裁判官功労
- ◆ 瑞宝中綬章 木村 正裕 (72) (昭和 41 年卒) 元徳島県副知事＝地方自治功労
- ◆ 瑞宝小綬章 大野 実 (71) (昭和 42 年卒) 元国交省海軍局総務課首席海技試験官＝国土交通行政事務功労
- ◆ 旭日双光章 住友 武 (77) (昭和 36 年卒) 元徳島市歯科医師会副会長＝保健衛生功労
- 谷口 博美 (73) (昭和 41 年卒) 県医師会理事＝保健衛生功労
- 林 徳太郎 (81) (昭和 33 年卒) 県身体障害者連合会副理事長＝社会福祉功労
- ◆ 瑞宝単光章 川見 佳宏 (64) (昭和 50 年卒) 元徳島市消防団分団長＝消防功労
- ◆ 藍綬褒章 豊田 滋生 (87) (昭和 24 年卒) 自衛隊医療協力者＝自衛隊協力功績
- 豊永 寛二 (64) (昭和 49 年卒) 県労働委員会＝労働行政功績
- ◆ 瑞宝小綬章 大原 清 (昭和 43.4 ～ 57.3 在籍・英語) 元県立板野高校長

令和 3 年 春の叙勲 受章者

- ◆ 瑞宝重光章 園尾 隆司 (71) (昭和 43 年卒) 元東京高裁判事・部総括＝裁判官功労
- ◆ 瑞宝中綬章 石原 徹 (78) (昭和 36 年卒) 徳島大学名誉教授＝教育研究功労
- ◆ 旭日小綬章 笹谷 正廣 (70) (昭和 44 年卒) 元日本弁護士連合会理事＝弁護士功労
- ◆ 瑞宝小綬章 多田 公昭 (78) (昭和 36 年卒) 阿南工業高等専門学校名誉教授＝教育研究功労
- ◆ 旭日双光章 宮井 義博 (71) (昭和 43 年卒) 元徳島市歯科医師会副会長＝保健衛生功労

※敬称は省略させていただきました。

本年度総会幹事担当学年（平成 3 年卒）からのメッセージ

城南高校「愛」 大村 龍二



城南高校を卒業して早 30 年...現在 48 歳 気持ちは 18 歳ですが、年齢も見た目も立派なおっさん、いや 近い将来お爺さんになりそう 時間の過ぎ行く早さに共感する同級生はたくさんいるかと思っています。私がふと昔の思い出に浸る時は、小学校や中学校、大学での思い出ではなく、必ず城南高校での楽しかった日々を思い出します。野球部で甲子園を目指し、死に物狂いで練習した事、眠たい目を擦りながら一夜漬けの試験勉強をした事、一方で 悪ガキな友達と賭け麻雀をし、ワイワイ騒いだこと等々書ききれません。そして何よりも私の人生で最高で最愛の女性（現在の妻）が城南高校に居た事 楽しかった思い出がどっさりと蘇ってきます。だからなんだろう その時の幸せを引きずるかのように、気持ちは 18 歳でいるのだらうな 今子供が 2 人いるのですが、長男は城南高校を卒業しました。又次男は今年城南高校に入学しました。家族 4 人全員城南高校の卒業生になる見込みです。私たち城南高校卒業夫婦が城南高校「愛」を家で奏でているのが子供たちに伝わったから子供たちも城南高校に行ってくれたのかな？と思っています。後輩たちにもこの素晴らしい学校で、最高の思い出を作ってもらいたいです。そして同窓生と再び会える日を楽しみにしています。

城南高校同期の皆さん 青木 宏人



ご無沙汰しています。

運営の百木君、お声かけありがとうございます！
卒業して 30 年以上経つので、ちょっと自己紹介。

僕は、将棋が強くて城南時代、全国大会に出ていたけど勉強は全くだめで、大学受験は、全滅。その後、浪人したけど、また全滅。結局、英語の専門学校に行って、なんとなくパチンコメーカーに 21 歳で就職。

仕事は頑張っていたけど、知識がまったくない自分に嫌気がさし、中小企業診断士の資格取得を目指すことに。でも 4 年連続不合格。無謀な挑戦でした（汗）

29 歳でなんとか合格して経営コンサルとして独立するが、仕事が全くなく、月の売上 8 万円という悲劇。プロの世界は甘くない。警備員や居酒屋のバイトで凌ぐ日々。何をしているか？（35 歳）でも今は経営コンサルとして仕事をしています。

今の時期大変ですが、来るべき未来に向けて、今を乗り切りましょう！
きっといいことがありますから。

再会を楽しみに。 青木 宏人より

後援会活動（令和 2 年度実績・令和 3 年度計画等）について

城南高等学校後援会長 酒池 由幸（昭和 50 年卒）



旧徳中・城南高等学校同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げますとともに、後援会活動へのご理解、ご支援をいただいておりますことに心からお礼を申し上げます。

さて、2 年度の実績として、①職員室前質問コーナー開設備品一式（大型ホワイトボード 2 台、スタンディングディスク 5 台）②自習室用パネルデスク（32 セット）を寄贈することとし、2 月 8 日に目録を贈呈しました。支援金額は約 90 万円です。

一方、後援会への会費寄付金の納入については、個人 5 名の方から 19 万 5 千円、団体として阿波銀行、徳島県庁、徳島大正銀行、日亜化学工業、徳島市役所、四国放送、徳島新聞社の 7 支部から計 63 万 7 千円余のご協力をいただき、合計で 83 万 2 千円余のご入金をいただきました。

これとは別に、令和 2 年 8 月 6 日には、後援会活動の趣旨に賛同した昭和 45 年卒業の皆様が卒

業 50 周年記念同窓会開催の機会を捉えて支援金を集め、集まった 50 万円を母校に直接寄付していただきました。（コロナ禍のため、残念ながら同窓会の集いは延期されたとのことです）

このように同窓会開催等の機会を捉え直接支援していただくのも母校の教育環境の向上に大いに寄与しますので、後援会としても皆様にご協力をお願いしたいと考えております。

令和 3 年度の後援会の支援事業については、学校側と協議の上、適切な支援を行って参りたいと考えておりますので、本年度も一層のご協力をお願い申し上げます。



自習室に整備されたパネルデスク（32 セット）

後援会ホームページ URL
同窓会のホームページと共用
<https://jonan-ob.com>

◆会費等振込先◆

会費は一口 5,000 円（何口でも可）
名はいずれも「城南高等学校後援会」

金融機関名	店番号	口座番号
阿波銀行本店	100	普通 1192723
徳島大正銀行本店	001	普通 7815411
(ゆうちょ銀行)	口座 記号 番号	01680・2・60805

2020 年 城南 FS 会（近畿支部会）

城南 FS 会代表（近畿支部長）糸田川 廣志（昭和 42 年卒）

“2020 城南 FS 会”は、2020 年 10 月 3 日（土）大阪西梅田の（一社）中央電気倶楽部にて開催しました。春先からのコロナウィルス感染拡大が懸念される中、10 名ほどに声をかけて今後の方向性について話し合いをしました。

近畿支部は 1973 年 7 月 14 日に設立され、その設立趣旨は創立 100 周年事業への寄付金要請が大きな要因であったと 1991 年の支部会報に記しています。

100 周年事業への寄付金は、1975 年に 276 名による 6,449,000 円が募金決算額になったと同会報に記されています。50 年前の金額としては相当な額でした。選抜出場時の近畿支部募金は 330 万円余りでしたから凄い先輩達です。

“2020 城南 FS 会”で議論されたのは、50 周年で解散を予定しているが、そこへの意見交換でした。現状として若い人達が関西圏に居住する人数が大きく減少し、参加者も年々減少しているため、50 周年を機に解散と私は判断しているが、その判断に対する率直な意見交換をしました。その中で、貴重な意見が若手から寄せられました。仕事の中で、徳島出身で城南高校卒業と言うと評価を高くされたと話してくれました。

永年に亘り諸先輩たちが関西圏で築いてきた実績、軌跡が評価されていることを示すものと改めて実感しました。そのような評価があるため、後輩達には何とかして近畿支部を継続させたいとの意見がみなさんの総意となりました。ただし、年々減少する近畿支部会員のため、みんなで力を合わせて運営をすることが必要となることなども意見交換して、その方向で進めていくことに決定し取り組むことになりました。

私の役割としては、これらを支援しながら 2023 年の 50 周年を機に、軌跡創りを進化させていく支援をしていこうとの考えに至りました。現在も技術士として現役を継続しており、生涯現役も視野に入れており何とか城南 FS 会支援を継続していこうと思っています。

先般、今年の準備会をコア 4 名で行い、基本方針を決めました。2021 城南 FS 会は、コロナ禍を顧慮して、9 月 5 日（日）に開催予定としました。詳細については、みなさまに送付する同窓会会報に同封致します。

以上のような近畿支部の方向が進んでおり、新しい歴史づくりに踏み出して行こうとしています。近畿支部のみなさまには、ご協力ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

このような方向性が見出される過程で、近年になり思い出されたのがスポーツ（私の場合は陸上競技）に熱中する中、城南高校で学んだ私の基礎でした。

【その 1】生徒を育てる方向が人間としての成長を基本にしていると社会人となって先生方からかけられた言葉にあったと実感しています。入学時の校長先生からは、校外では長髪で柏の金ボタンはみんなが注目してきているから責任ある行動をするようにとアドバイスがありました。

【その 2】平等性やその実効性の驚きでした。入学後にリレーメンバー選択で、記録会に先輩と共に出場しました。先生は上位 2 名をメンバーにすると公言し、私が 1 位でしたが、タイム差は先輩 2 名と大差なくリレーメンバーには外れたと思いましたが、公言のとおり選ばれました。少し仰天でした。中学時代のリレーアンカーも評価してくれたとも思いました。

これらの経験は、大学卒業後 2 年で大学恩師の独立に伴い設計コンサルタント創設と会社拡充、技術者育成の基礎になっていたと今更ながら感じています。

また、私に可能性や邁進力を注入してくれる同級生達の活躍は、いい刺激で確実にライバル心を燃やしてくれました。そのベースは城南高校にあります。

そんな軌跡を創ってくれた“城南 FS 会”を、みなさんとともに継続させることを今後の大きな楽しみにしたいと思っています。

2020 年 渦の音クラブ (関東支部) 活動報告

事務局 三橋浩志 (昭和 59 年卒)・三橋稔子 (昭和 59 年卒)

渦の音クラブ (関東支部) は、関東在住の旧制徳島中学校と城南高校卒業生の相互の交流と、母校の支援を目的として活動しています。会報の発行、総会の開催、若手会員交流会の開催、年 3 回の理事会の開催、母校の東京開催 (全国大会) の激励などの活動を行っています。会員交流として、2020 年度・第 45 回「渦の音クラブ (旧制徳島中学校・徳島県立城南高等学校関東地区同窓会) の集い (総会・プレゼン交流会・交流会)」をオンライン (Zoom 上) で開催しました。徳島の同窓会本部事務局には、栗飯原会長、船越事務局長とともに、校長先生、副校長先生もご参加いただき、さらに保健体育の大西先生と数学の高木先生も参加いただきました。関東在住者に加えて徳島、さらに海外からの参加もありました。

通常は一人の卒業生によるご講演を今年は「渦の音 TED」と題して、一人 10 分のショートプレゼンを 6 人をお願いしました。6 人は、澤田達男 (昭和 49 年卒)「新型コロナと大学の近況」、大西正先生 (昭和 41 年～53 年・体育) と高木純一郎先生 (昭和 49 年～平成 2 年、平成 7 年～15 年・数学)「城南高校、思い出話」、櫻井歩 (昭和 57 年卒)「日本経済、株式市況の見通し」、森俊彦 (昭和 49 年卒)「地域金融の未来」、池田恭己 (平成元年卒)「いますぐやりたいくなる瞑想」、吉田周一郎 (昭和 62 年卒)「神山町プロジェクトに関わって」で、多彩な分野で活躍している人材豊富な城南高校卒業生の強みを感じました。



集合写真

懇親会でビールを交わしながらの交流を再現すべく、4 人から 5 人の「ブレイクアウトルーム」に分かれての交流会を 15 分ほど行いました。「あつという間だった」という声を後でお聞きました。

学年は違って初めてネット上で会った仲でも、同じ城南高校の卒業生として交流を深めることができました。

初めての試みですので、いろいろと事務局の不便もありましたが、皆様のご協力でなんとか「2020 年度・第 45 回渦の音クラブの集い」を開催することができましたこと、お礼申し上げます。

また、「渦の音クラブの集い」では、

卒業 30 年目の満 48 歳時 (49 歳を迎える年) に幹事として懇親会のお世話をお願いしています。これから



幹事学年となる世代と、幹事学年を終えたばかりの学年の交流を深めつつ、50 歳以下の会員発掘を目的に、2012 年から「若手会員交流会」を参加費無料で開催しています。今年は、新型コロナ感染を受けて、渋谷・神泉の徳島県のアンテナショップ「ターンテーブル」に「3 密回避対策」を講じながら集まりました。「スダチぶり」、「阿波尾鶏」、「阿波美豚」、「和田島のちりめんじゃこ」などをいただきながら、「3 密回避」

しながら交流を深めました。徳島と渋谷・神泉を Zoom で繋げての交流も行うなど、新しい取組に挑戦しながら、城南高校若手会員の交流を深めました。



若手交流会

「2021 年度・第 46 回渦の音クラブの集い」は、新型コロナの感染状況も勘案し、ホテルニューオータニ「ガンシップ」での開催と、オンライン (Zoom) 開催を 1 か月前までに判断し、**2021 年 10 月 24 日 (日) の開催**を予定しています。詳細は渦の音ブログや Facebook で発表しますので、ご確認をお願いします。

旧徳中・城南高校同窓会ゴルフコンペ

第 11 回「渦の音カップ」のご案内

日時：令和 3 年 10 月 10 日 (日曜) AM8:32 スタート

場所：サンピアゴルフクラブ

費用：プレー代金 ¥13,780 (税込、食事代は別)、参加費 ¥3,000

幹事：S57 卒 西林茂樹 090-8695-5336、藤川卓司 090-1577-2841

呼びかけ人：森莊太郎 (S37 卒)

・新型コロナの状況により変更／中止となる場合もございます。

・詳細は幹事までお問い合わせ下さい。

事務局の案内

同窓会などのお問い合わせは下記の事務局までお願いします。
同窓会・後援会ホームページもご活用ください。

旧徳中・城南高等学校同窓会事務局

〒770-8064

徳島市城南町 2 丁目 2-88 城南高校内

船越 隆子 (昭和 51 年卒)

✉ info@jonan-ob.com

🌐 https://jonan-ob.com

Tel.: 088-652-0084

FAX: 088-656-0484



Face book

渦の音クラブ (関東支部) 事務局

〒112-0001

東京都文京区白山 4 丁目 24-17

三橋 浩志 (昭和 59 年卒)

✉ info@uzunooto.jp

🌐 http://uzunooto.jp



Face book

日々の活動はフェイスブックでも発信中
「渦の音クラブ」に「いいね」をよろしく

城南 FS 会 (近畿支部) 事務局

〒665-0845

宝塚市栄町 3-1-11-903

事務取扱は下記まで

〒771-2501

徳島県三好郡東みよし町昼間 573-2

糸田川 廣志 (昭和 42 年卒)

FAX: 0883-79-3270

hiro4823ito@yahoo.co.jp

発行ご支援金の
御礼とお願い

日頃より城南高校同窓会活動にご理解ご支援を賜り、誠にありがとうございます。

今年度より会報は、ご送付の重複を避けるために、同一住所の同窓生にはまとめて 1 部をご送付させていただくことになりました。誠に恐縮ではございますが、協力金の振込用紙は人数分を同封させていただいております (このお振込みは、同窓会報の代金ではなく、任意の同窓会への協力金でございます)。何卒、同窓会へのご協力をお願い申し上げます。

ゆうちょ銀行 加入者名：城南高校同窓会会報係 口座番号：00140-0-710668